

† オーバーロード
Alle Mitglieder †

八朔日

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モモンガ「皆ー！ 最後の日くらい一緒に過ごそうよー！」

皆「オツケーー！」

モモンガ「やったー！」

目次

へろへろさん回顧して曰く | 1

朱雀さん、皆の前で「さて」と言い

63

へろへろさん回顧して曰く

そうだなあ……ああ、その日も忙しかったよ。

ただ当時はそれが普通で、疑問を抱く余裕も無かったくらいで。

だからいつもの様に仕事絡みで方々から送信されて来たメールを捌いていた時、何だかやけに久し振りに感じる送信相手の名前に……まあ、酷い違和感を覚えたものだけ

「——モモンガさんから……う……へえ……そうなんだ……」

それは、こうなる前に遊び倒していたDMMO—RPGで所属していたギルド長からのお誘いで。

要約すると「サービス終了の日にゲーム内で会えませんか」との事だった。

日付を確認すれば二週間後。

調整しようと思えば出来ない事も無い。

ただ……

「……ユグドラシル、終わるのかあ」

溜息と共に椅子に深く座り直し、軋む音を聞きながら天井を仰ぎ見る。部屋の照明は薄暗く、ぼんやりと見える天井からは何か迫ってきているような錯覚を覚えた。

目をマツサージする。

そう言えば最後にログインしたのはいつだったけ？ 転職が決まってそう間もないくらいだったから……結構経ってしまっている気がするな……。

そう、転職。

確かに自分の能力を存分に活かせる場に恵まれた事は嬉しかった。

ただ、その感情が摩耗する程に日々の膨大な業務に晒されて、今日がいつで明日がいつなのかも曖昧になった辺りで……やつと後悔した。寝て起きたら明日になっていた頃が懐かしい。

とはいえ後の祭りだ。

再転職と言う手もあるらしいが、転職先を探す余裕が無いし、今の職場から僕が抜けたら他の皆への被害は甚大。恨まれるだろうし、朝刊一面……はまあ言い過ぎにしても、どこかに名前が載りかねない。

「楽しかったなあ……あの頃は」

無論ゲームは楽しくて当たり前で、楽しくなければプレイする価値も無い。そしてユ

グドラシルはアインズ・ウール・ゴウンにて仮想現実を過ごしていた当時の僕は、人生史においてトップクラスにゲームを楽しんでいた。

少々感慨に浸った後、ユグドラシルを起動。別に今すぐだなんて余裕はないが、アップデートとか色々あるに決まっている。当日、もし余裕があった時になってから慌てたくはない。

案の定アップデートデータは大量にあり、即座にアップデートを始める。

「結構時間かかるなあ……まあいいか、とりあえず放置で」

日付とユグドラシルと書いた付箋を仕事用のボードに貼って、僕は仕事に戻った。

そして——二週間と言うのは一瞬に近い。

気が付けばその日であり、二週間前の自分の配慮に感謝した。

「これ絶対間に合わなかったよなあ……」

何せ久し振りに遊ぶのだ。DMMO—RPG用の必要機材をどこにしまったか思い出せなくて、軽く部屋をひっくり返すのに結構時間を費やしてしまったている。

これでアップデートとか何とかやっていたらと思うと……モモンガさんには悪いが寝る方を優先してしまっていただろう。

機材の埃を払いつつ、とつくにアップデートが完了していたユグドラシルを起動。

ヘッドマウントディスプレイ型のデバイスを装着し、ゆったりと椅子に座り直して瞼

を閉じる。

懐かしのオープニング画面、ミュージック。ああそうそうこういうのだったよと思いつつ、ゲームに入る前に自分のアバター等をチェック。

……そう言えばこんなんだったか。

紫色の……エルダーブラックウーズ？ を見ながら少し感慨に耽る。

そう言えば何処からスタートになるんだろう？ まさかギルドの本拠地が未だに維持されているなんて事はないだろうし。入ったらとりあえず^{メッセージ}でモモンガさんに連絡入れないとな……。

そんな事を思いながらゲームにダイブした。

一瞬の浮遊感。

「……………」

そして目に飛び込んできたのは、大画面で繰り広げられる多対多と思しきムービー。冷静であれば、これはギルド最大の危機にして最高の魅せ場だった1、500人の討伐隊との戦闘シーンである事に気付けた筈だ。

しかし僕は冷静ではなく、呆然と繰り広げられる激闘の様子を眺めていた。

「あつ」

不意にそんな声がして映像が止まり、画面が消える。

次いで連続する軽爆発音。

飛び散る色とりどりの紙吹雪とか。

「え？」

そして僕は我に返った。

そうだここはナザリック地下大墳墓の円卓の間だ。

円卓上にスクリーンを表示してムービーの観賞とかをよくやっていたのを思い出す。

「ちよ」

ここがまだ存在してたのかとかあんな高解像度のムービーどこにあったんですかとか、そんな事は些細なもの。

「どういう事ですかこれー!？」

叫ぶ。他に何が出来るだろう。

そうしたら周りから一齐に笑顔のアイコンが表示された。

「ハハハハハ、まあ分かんなくてもない」

「一般的にはこれビビるよね、俺もビビったし」

「へロへロさんおっそーい！」

「このクラッカー計画発案したのいつものあいっだからねー」

「お久しぶりです、元氣してました？」

「明美が……来れなかったのが、残念」

「社畜まで来るとかギルドの真の結束手パねえな」

「いやーまさか全員来ちまうとはねえ〜」

「つーかさ？ みんな暇過ぎじゃね？ こんななら普段からインしても良かったんじゃない？」

「バーカ今日は特別だから皆来たんだろーが」

「そうそう、モモンガさんから連絡来なかったらどうなってたか」

「まー引退してたしね、俺ら」

「ギルド長直々の召還状の上に最後の日とあれば、時間を空けぬ訳にもいくまい」

「ま久し振りだったから色々あったりしたけどねえ〜」

騒がしい円卓内。先程周りから一斉に放たれたクラツカーの中身がエルダーブラツクウーズの身体に触れてぶすぶすと溶けているが、そんな事はどうでもいい。

「ちよ……何……皆揃ってるならそうと先に言ってくださいよ、それならもつとこう、後一時間でも早く来れたかも知れないのに……」

円卓を見回せば全ての席が埋まっていた。

つまり、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーが揃っている。

有り得ない事が有り得ていた。

僕がこのゲームを遊んでいた頃でも、全員が揃うなんて言うのはある時期以降皆無になったのだ。それは先の討伐隊を撃退した一カ月後辺りからか。なんとなく「エンディング来ちゃった感」がギルド内に蔓延し、以前程の情熱をゲームに傾けられないような雰囲気が出来てしまっていた。

言うなればゲームに満足してしまっただのだ。

それは本当に些細な事で、何かちよつとした切欠の一つでもあれば簡単に払拭できたりじゃないかという程度のものだっただが……一人また一人とそれぞれの事情から顔ぶれが減っていく方が早く、モモンガさんはベースが骨格標本なのにそれと分かるくらい寂しそうにしているのを——ああそうだ。

「モモンガさん」

飾られたギルド武器を背に、顎が凄いギルド長は僕の方をじつと見つめていた。

「モモンガさん、いや、なんだか……すみません。まさか僕が最後の一人だったとは」「いえ、良いんですよへロへロさん。こうして来ていただいただけでもありがたいですし、それに全員が揃うなんて……本当、思ってもみませんでしたから」

モモンガさんの相変わらず人の良さそうな声と仕草、そして感慨深げな言葉。

正直、ユグドラシルがサーピス終了するとの連絡には大して心は動かなかった。

だがこうしてダイブし、モモンガさん——どころか全員が揃っている円卓の間に存

在し、皆の声を聞くとあの頃の感情が一気に自分の中に戻ってくる。来て良かった、本当に。

「……でも驚きましたよ。勢揃いしているって言うのもありますが、このナザリック地下大墳墓がまだ存在していたって事に。維持費とか馬鹿にならなかつたでしょう？」

「ああ、まあそこは……ソロでもそれなりに効率良く稼げますからね」

「ソロ……？」

少し言い難そうなモモンガさんの言葉に思わず声が零れる。

てつきり誰か他の……二人か三人かで組んで稼いでいたと思つたのに。

「ヘロヘロさん知つてた？ モモンガお兄ちゃんつたらずーつと独りでとナザリックを維持していたんだよお？」

そこへ卑猥な肉棒が震えながら可愛らしいアニメ声を発してきた。

懐かしいなこの違和感……。少し視線を巡らせば精神的ダメージに身体を震わせるバードマンも居て、ああ、この姉弟も相変わらずなんだなとしみじみ思う。

「茶釜さん……そうだったんですか。……何か、改めて申し訳ない気分です。少しでも手伝えれば良かったんですが……」

「そんな良いんですよ、いつギルドのメンバーが戻って来てもいいように私が勝手にやっていた事なんですし、リアルは大事ですし。それに……こうして奇跡が起こったん

です、昨日までの苦勞なんて吹き飛びましたよ」

楽しそうにモモンガさんは言う。

奇跡。

確かにそうだ、引退を宣言し、モモンガさんに装備を預け、そして二度と戻る事は無いと思われた引退者達。僕のように自然消滅的に現れなくなった者達。それが最後の日だからと駄目元で連絡入れたらそれだけで全員がやって来たのだから。

モモンガさんがどのタイミングから円卓に居たのかは知らないが、続々やって来るギルドメンバー達にどんなりアクションをしただろう。……あ、見たかったなあそれ。等と思いつつ、二度三度モモンガさんと日本人らしいやりとりを続ける。

こちらが申し訳ないと言うもモモンガさんから気にしてないですよ大丈夫ですよと返されるので少々参ってしまう。多少なり責められた方が精神的には楽なんだが……まあモモンガさんだしなあで納得する事にした。

「それでどうする？ ムービーの続きでも良いけどさ」

そうして僕とモモンガさんの話が一区切りついた所で、先程のバードマン——ペロロンチーノさんが軽く片手を挙げつつ言う。

視界に表示されている時間を確認すれば22時40分。ユグドラシルの終了まで後

80分か……。

正直睡魔が結構キツいが、多少の無理をしてもこの場を辞するのは避けたかった。今を逃せば次は間違いないのだから。

「ナザリック観光するには時間が足りないし、ムービーはまあいつでも見れると言えれば見れる」

「自分の製作物見て回る……程の時間もないか」

「一日潰すどころの騒ぎじゃ済まなさそうですしね」

「今更表に出て運営主催のさよならイベントに顔出すつてのもな。……AOG勢揃いだからって流石に予定を変更してPK祭りにはならないだろうけど」

「いんや、分らんぜ」

「そうだな、何せユグドラシルの運営だ」

「説得力ありますよねー、それ」

笑いも混じりつつ今後どうするかを話し合う。と言ってもあれこれ言うだけで纏めようとと言う気概に欠けているのは古式ゆかしいブレーションストリーミングの段階だからで、つまりは、

「まあ最後までナザリック内で過ごすとして……モモンガさん何かありますか？」

「あ、そうだね。ギルド長とか以上にナザリックもアインズ・ウール・ゴウンもモモンガさんが居たからこそ存続できているんだし」

こうしてモモンガさんに視線が集中する懐かしくもいつもの流れだ。

皆分かっていてやっているのだろうし、モモンガさんも嬉しそうに見える。

「んー……そうですね、じゃあ……とりあえず皆で玉座の間に行きませんか。以前から最後の瞬間をそこで過ごそうと決めていたんです」

「……成る程、それも良いな」

「思えばあの時あそこまで攻め込まれてみた方が良かったかもなー」

「そうかー?」

「あ、じゃあさ、記念撮影もしちゃわない? ここでこうして揃うなんてもう無いんだし」

「そうだねえそうしよそうしよ」

すると皆口々に賛同の意を示し、少し前まで全く纏まりを見せなかったのが一気に纏まった。

アインズ・ウール・ゴウンでは良く有る光景なのだ。

モモンガさん自身は自己評価が低いようだけど、このギルドメンバーをしてこの様に纏め得るのはモモンガさんをおいて他にいない。たちさんが彼をギルド長に推した際に誰も反対しなかった時点で少しは誇つても良いくらいなだけ……まあ、その辺りを鼻にかける様なモモンガさんでは無いのも分かつてはいる。

「記念撮影かあ……あ、それなら皆さんの装備を残してありますから……折角ですし皆で取りに行きまじょうか」

ただ、モモンガさんの発言には彼を除く全アインズ・ウール・ゴウンが驚いた。

それも結構引き気味に。

その空気を察したモモンガさんは「あれ？」って感じになっていたのだが、すぐに誰かの咳払いが雰囲気の変化を引き留める。

「ま……まさか装備が保管されているとは思いませんでしたよ」

「うそうそう、ビックリだよガチで」

「あつじやあ往年の純銀の聖騎士とか伝説の大魔術師とかの御姿が見れちゃうって誑？」

「お前そういう所だけはすらすら覚えてやがるのな」

「あつたねー二つ名。懐かしいったら」

「自称はともかく周りから勝手に呼ばれるのはしょうがないよねえ」

「いやーアカウント消してもアバターとかのデータがサーバーに残されてて良かった！」

「全くだ。アバターとレベルがそのままだからこそ価値も出ようというもの」

「再インストールしたらまさかの以前のデータを引き継ぎますか？ だもんねえ」

「イベント進行不能とかの対策なのかな」

「どこぞのイベントが達成不可能になってもワールド舐めんとか真顔で抜かして対応しなかった運営がそんな事するとも思えんが」

「それはワールドアイテム絡みだからじゃない?」

「じゃあギルドが残ってたからとか」

「……何か特定の条件に必要なのかも。隠し職とか」

「まーなんであれ一般的にこれでごめんレベルの別アバター再スタートなんだわってなつてたら厳しいしどーでも良いは良いんだが」

「ま、まあそこは……流石に、うん……」

そして皆が喋り出した。

誰だつてこんな時に沈んだ空気になるのを望んじやいないし、話題が出れば勝手に進んでいくし脱線もする。数の暴力だな。

「あーとにかく、移動しましょう移動。時間がもつたいたいですよ」

となればモモンガさんが両手を上下させながら道筋を正すのは当然で、その結果円卓の間に小さな笑いが起こった。

年単位の間があつたにも関わらず、いざ全員揃ってみればあの頃のまま。各々思う所はあるだろうし、これがサービス終了の日だからと言うだけに過ぎないのも分かっている。

だけでも、惜しい。

この時間をこうして共有できるのが今日で最後だという事に。

「……じゃあ、引退された方に指輪再配布します。皆さんの装備が保管されている宝物殿はこれがないと入れませんからね」

笑いが収まったのを見計らって、モモンガさんは手元に表示されたコンソールを操作して引退組にギルド内での転移を可能にする指輪、リング・オブ・アイズ・ウール・ゴウンを渡していく。

同時に非引退組はそれぞれ自分のアイテムボックスから指輪を探す。

探すのだが。

えーつと……待てよ、確かショートカットに登録……されてないな。あれえ？　すぐ取り出せる所になんで無いんだよ数年前の俺ー。

等々ブランクもあつて手間取っていたら、モモンガさんが引退組に指輪を配布し終わる方が早かった。

「では行きますよー」

「つとその前にモモンガさん」

「はい？」

「忘れ物があるんじゃないですか？」

今まさにせーので宝物殿へ転移しようという所でたっちさんがまったをかける。

ワールドチャンピオン専用装備ではないにしても、アイテムボックスに残っていたのであろうガチガチな騎士装備で固めている辺りあの人もブレないなあ。

ともかく、自分の後ろを指差されて回れ右したモモンガさんは、ギルド武器

“スタッフ・オブ・アイنز・ワールド・ゴウン”

と対面する。

あの黄金の杖を完成させるためにギルド全員が多大な労力をかけた事は良い思い出だ。

と言うよりあそこまでするとか馬鹿じゃないのかとも思えてくる。

装飾にあしらった7つの宝玉なんてもう出ないよ止めようよと言う意見が蔓延しそうになると必ず手に入ったので、運営に監視されてるんじゃないか？ 説まで飛び出たっけ。

無論、当時はそういった諸々をも存分に楽しんでいただけのだけれど。

「……しかしこれは……」

「良いんじゃないですか、今日で最後なんですし」

「そうそう、あの時ですらとうとう持ち出さなかったんだから、今日ぐらい装備してあげないと」

「折角作ったんだしねえ〜」

「似合うだろうなーカッコいいだろうなー」

「ギルド長なればこそギルド武器を一度は運用すべきだな」

「はい、じゃあモモンガさんがギルド武器持ち出すのに賛成人ー」

躊躇し、振り返るモモンガさんに皆で畳み掛け、41人中40人が手を挙げた。

「と言う訳ですから」

「そういう事なら……分かりました、最後ですもんね!」

笑顔アイコンを発するたちさんに応じて笑顔アイコンを発し、モモンガさんは黄金の杖へ向き直る。

多数決に逆らう事は例えギルド長であっても不可能だ。

少し厳かになった雰囲気の中、モモンガさんは黄金の杖に向かって歩き出す。

そうして静かに回転を続けていた黄金の杖を手にすれば、恐ろしげなオーラが発生し、モモンガさんの手にすつきり収まる。

思えば黄金の杖のデザインはおろか装備時に発生するオーラのエフェクトに至るまで一体何時間を議論に費やしたのやら。

そう考えるとやはり最後だけでも実際に装備した実績が出来たのは良かったと思う。

モモンガさんは黄金の杖を手にしたまま感慨が何かに耽っているのか、少しの間を置

いた後、颯爽と振り返って宣言した。

「では行きましようか、宝物殿へ！」

黄金の杖を手にしている事で貫禄が増したモモンガさんの言葉に、返事がぴたりと揃ったのは偶然にしては出来過ぎだ。

誰かの苦笑が聞こえた気がしたが、直後に指輪の効果が発動して視界が暗転。

宝物殿に転移したアインズ・ウール・ゴウンのメンバーを迎えたのは黄金色の山だった。

まぶしい。すごく。

「おお、この財宝の山をまた見る事になるとは」

「いや壮観壮観」

「この手の山が後いくつあるんだっけ」

「そらお前……沢山だよ」

「整理しきれないアイテムが金貨に埋めてもあるんだっけーこれー」

「確かそのは、ず……ん？ いや待て。どういう事だこれは……」

「え、あれ？ ……減ってなくない？」

「マジだ」

「流石に全然て事は無いだろうけど……」

「うへあー」

久し振りの黄金色の風景に感嘆した所に何人かが疑問を口にし、調べてみればギルド資金の桁が兆のまま。

いくらモモンガさんが効率良く稼いでいた所で、ナザリックの維持費によつて結構減っているだろうと皆が思っていたのだが。

「モモンガさん？」

これは一体!? とばかりに40名の視線がギルド長に注がれる。

「いやあ……ほぼ手を付けてないだけですよ?」

何故か照れくさそうなモモンガさん。

これはあれか、ギルドの資産を独断で動かす訳にはいかないとか言う感じか……?」

まさか独りで延々金策を……?」

いやいくらなんでも……時間かなりかかるんじゃないや……?」

視線が彷徨えば、同じような思考に至っていたのか周りの皆と知らず目線が合う。

こう……嫌な予感と言えば失礼なんだけど、でもそんな感じの奴。

「私一人の判断では独断になつてしまえますから、極力ギルドの物には手を付けられない様にしていただきます」

そして的の中。

これにはモモンガさんを除く全アインズ・ウール・ゴウンが引いた。

「一般的にこれは激重……」

「いかん、モモンガさん割と入れ込み過ぎるタイプだったか」

「ブラックホール出来てない？ ……魔法じゃなくて宇宙の奴」

「やべえよ……やべえよ……」

「一体どれ程の……」

「どうしてこんなになるまで放っておいたんだ……」

「モモンガさん……つまりえっと……うわあ……」

慄きにも似た状態で皆の口から感想が零れ落ちる。

小声ではあるが精神的ショックはかなりキツイ。

装備が残っているのはともかくとしてもこれは……流石に……。

だがしかしこれは引いた側全員の連帯責任とも言えるか。

40人も居てその中の誰一人としてモモンガさんのユグドラシル愛の深淵っぷりに気付けなかったのだから。

「……あれ？」

あれ？ じゃないですよモモンガさん。

さつきも似た空気になりかけてましたけどその時も首傾げてましたよね。どんだけ

天然なんですか。萌えキャラ気取りですか。あざとい。あーでも前から割とそういう所がありましたっけね、じゃあつまり素でこれか。……成る程、茶釜さん以下女性陣が只ならぬ話題で盛り上がっていたのも今なら分からないでもない。一端離れて冷静な視点を得たらこんな事に気付かされるなんてどうなってるんだ。

ともかく……今は停滞した空気を動かさなきゃならないか。

「……うあー、えーつと、お疲れ様でしたモモンガさん。……本当に」

そんな訳でありがとうのアイコンと共にようやく絞り出したセリフがこれだった。

「いえいえ、ギルド長として当然のことをしてただけですよ、ヘロヘロさん」
するとこれだ。

善意の塊や義務感とかではなく、言葉通りそれが当然だと思ってる感じがさせる言動。

きつい。

ゲーム熱が冷えていなければ感動に結び付いたかも知れないけど……。

「さて、行きましょう」

どう返したのか考えかけていたらモモンガさんはさつと踵を返している。正直ありがたい。

皆で向かうのは宝物殿の一角、途中毒無効付与や飛行等を挟み、黄金と財宝を観覧し

た後目的地に辿り着く。

ここは端的に言えば転移地点の向かいに当たる場所で、そこだけ壁ではなく闇に覆われた部分がある。あの見るものを吸い込むような圧倒的な闇には……確かペンタブックが使われていたんだっただけかな？ もっと深い黒はあるがこのゲーム上再現できる上限が確かその程度だった筈。

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ」

考えている内にモモンガさんが闇の前で宣言。

確かあれでヒントが出るんだっけな？

すると闇に光の文字が浮かび上がって行く……あーあれは。

確か……なんだっけ。ていうかヒントになるのかあれ。

「えー……」

当のモモンガさんもちよつと考え込んでおり、それを見たタブラさんが一步前へ出かけた所で「そうだ」と手を打って語り始める。

「確か……かくて汝、全世界の栄光を我がものとし、暗きものは全て汝より離れ去るだろう。……だった……っけ？」

つかえる程で無いにしても、小学生が覚えたての長セリフを言っているような趣があり、言い終えた時には思わず皆が拍手。そして文字が消え、次いで闇も消え去ってそ

の先の通路が現れれば更に喝采。

「や、どうもどうも」

「いやー、流石モモンガさん。覚えてましたか」

「まあモモンガさんが無理でもあれ読めそうなの他に何人か居ますし」

「そうなの!?! すげえ! 俺忘れてたよ!」

「私も」

「ボクも」

「うん」

「あー……ちよつと全部は暗唱し切れなかったかな」

「なんだっけあれ。エメラルドタブレットだっけ」

「そうそれ」

「好きだねえ」

「さて、それじゃあ皆で装備を取りに……あつ」

雑談を切り上げがてら歩き始めたモモンガさんの足が止まる。

何?

どうしたの?

と全員から疑問が向けられるが、当のモモンガさんは五秒くらい頭を抱えるようにし

ていた。

「あの……すみません。そういえばここから先に改めてトラップをしかけていまして、あの無差別な奴。えと、一人だと何かあった時の対処が難しいですから、で、えー、その装備は取ってきますので皆さんちよつとここで待っていてくれませんか？ ああ時間には取らせませんよすぐ戻って来ますからええ」

いやに早口だったのが少し気になったものの、理由も納得できれば久し振りの僕達が付いて行って面倒事になるのは避けたい。

どんなトラップか興味深くはあったが、まあ、今日で最後だしな……。

「ああ、大丈夫ですよ気にしない気にしない」

「そうですね、ここから先にある物を考えれば防御は何重にしておいても十分と言う事は無いでしょうから」

「あーそつか、ワールドアイテムもこの先なんだ」

「そういえば結局ワールドアイテムって全部見つかったのかな？」

「どうなんだろう、モモンガさん知ってる？」

「え？ うーん……ちよつとそういう話は聞いてませんね。ワールド・サーチャーズがありそうなポイントを見つけでは公表していましたが、挑んだプレイヤーがいたかどうかまでは……」

「と言う事はとうとう誰もこのゲームのクリアは出来なかった訳だ。世界を踏破し得ず、隠された財宝を入手し得ず、謎は謎のまま、か。運営としては複雑な所だろうな……」

モモンガさんの答えに朱雀さんがまるで語部の様な調子で言った後、頭を左右に振る。

確かに、ゲームとしてはやはりクリアされねば開発側としては失敗作も良い所だ。でもこのユグドラシルに限れば、プレイヤーと運営のガチバトルな部分もあったので、今頃外のさよならイベントでは運営PCがステージ上で「残念だったねえ！」くらい叫んだ後世界のネタばらしを延々続けていても違和感無い。

視界の端でウルベルトさんが少し不思議そうにしているように見えたのが気になったが、まあ気のせいだろう。

「と、そうだ。装備装備。行ってきますね、すぐ戻りますからね」

思わず雑談が捗ってしまった所でモモンガさんが当初の目的を思い出し、大仰な装備に似つかわしくない駆け足で通路の奥へ消えていく。

「……さて」

その背が見えなくなった辺りでたっちさんが口火を切る。

「どうしたものか。思いの外モモンガさんが辛い事になっているんだけど……」

「私達のせいじゃない、と言い切るのも薄情だしね」

「でも皆それぞれ一回以上謝ったじゃん？ でもモモンガさん全然大丈夫ですよじゃん？」

「それなんだよなあー……」

「モモンガさんが良過ぎる所あるからなあ」

「まあそれもあるからこそギルド長やつてられたんだけど」

「人数減ってたし自然解散してると思ってたんだけどねえ」

「……整列をやっても良いんじゃないか？ いつかやろうって言いつつやりそびれてた奴があつたら確か」

「ああ」

「あれな」

自然と40人で円陣を組んで小田原評定が始まりかけていた折、ウルベルトさんが妙案を出した。

そうそう、練習までしたのに結局やらないままだった奴ね。

「良いんじゃないか？ アインズ・ウール・ゴウンの最後としても、RP的にも、モモンガさんに少しは報いる事が出来そうだ」

そしてたつちさんがウルベルトさんの案に乗る。

珍しい事だが有り得ない訳じゃない、そしてこうなった場合は大体それで決定だ。

この二人が折角賛同しているのにそれを覆す馬鹿がどこに居ると言うのか。

「えー？ でもさあ」

居たよこのるし★ふぁー野郎が。

だがやらせはしないぞ。

「じゃあウルベルトさんの案に賛成の人ー」

「えっ」

僕の議決提案に当然39人が挙手する。即時決定だ。

「ちょ、酷くない……？」

「お前こういう時くらいは最後まで大人しくしてろよ。後一時間やそこらなんだし」

どういふ茶々を入れるつもりだったのか想像したくもないが、機先を制されて項垂れるし★ふぁーさんが源次郎さんに小突かれている。

でもまあ、これはこれでと安堵もした。

今まで大人しかつたのが不自然と言えば不自然だったのだし……と言うか今まで良く我慢してたなこいつ。

「ただ、やるならやるで、ほら。位置とか色々決め直すと言うか思い出すと言うか。後練習もしなきゃだし」

「それもそうだ。えーっと最前列はともかく二列目からはどうだっけ」

「号令はたちさんと良いですよね？」

「他にいないしねえ」

「そう言う事なら任せよう」

「チツ」

「……何ならウルベルトさんがやつても構わないが？」

「ん？ 誰かやりたいって言ったっけ？」

「そうか？ では何故聞えよがしに舌打ちをしたか聞かせて貰おうか」

「ま……まあまあ二人とも」

「そ、そうだよ……」

「一般的にこの期に及んで角突き合わしている場合ではないね」

「そうそう、いつモモンガさん戻って来るか分かんないんだしさ？」

「じゃれ合いは止せ」

余り懐かしみたくない感じの一触即発の空気に建御雷さんが割って入り、アインズ・ウール・ゴウンのツートップを押し離す。

双方共長引かせる意図は当然無いらしく、大人しく引き下がった。

と言うかたちとウルベルトさんもこれ何年か振りなんだよね？

何で息ぴったりに踏み出して睨み合い始まつちやうかなあ。

こっちは久々だから肝が冷えるよ。

等々、色々危なっかしいがモモンガさんが戻ってくるまでに色々詰めておく。

何はともあれ事は一発勝負。

失敗してもまあ笑って済まされるだろうけど、折角だしビシツと決めたいのは皆同じ。

……だよな？



——一方宝物殿奥へ向かったモモンガは、チグリス・ユーフラテスの姿に変化して出迎えたパンドラズ・アクターを見て、振り返って誰も居ないのを確認して、ほっと一息吐いていた。

そしてパンドラの姿を戻させ、念の為設定を弄る事にする。こんな事にギルド武器を活用する事に抵抗はあったが、最速で事をこなす為には仕方ない事だ。

パンドラはアインズ・ウール・ゴウンのメンバーにそれぞれ変身する事が可能であり、ここを訪れた際その何れかに変身して出迎える様設定されている。

当然その様に設定したのはモモンガで、そう設定されたのは主に自分独りになつてからだ。

幾らなんでもこの設定を他のメンバーに知られたくはない。

「……危なかったあ」

出迎え設定を変更し、モモンガは汗の浮いていない骨の額を拭う。

「さて、こつちもだな……」

そしてパンドラに指輪を預けると、霊廟へと踏み入る。

「こんなの皆には見せられないよなあ……ゴーレムの造型ヘツタクソだし」

引退したアインズ・ウール・ゴウンのメンバーを模して自分で作ったゴーレムを前に嘆息。

まさか全員揃うような事態が起こるだなんて発想はゼロだった為、自分への慰めとして行っていた諸々の行為が想定外の痛手となって返って来ていた。

とりあえず装備を回収し、裸になったゴーレムは一旦台座からストックに戻して隠しておく。

まだゲームが続くのであれば潰して素材に戻しもしたろうけれど。

「これで良いか……」

ふと霊廟の更に奥、ワールドアイテムはどうしたものかと思っただが、放っておく事にした。

「装備を持ってくる以外に言っていないしな」

眩き、頷く。

そして……素早く皆の所へ戻る筈だが、すぐにはそうしなかった。

「……本当に、本当に来てくれたんだなあ、皆」

眩く。

そこには隠しようのない万感の想いがあった。

メールをギルドメンバーに出したものの返事すらなくその日を迎え、過度の期待はしていなかったとはいえ落胆を禁じ得ず、それでも少し早くダイブしたら既に待機していたるし★ふぁーからクラツカーを食らって驚いたのが遠い過去の様にすら思える。

モモンガにとってはそれだけ密度の高い時間を過ごしていた。

あのるし★ふぁーでも久し振りに会えた事でモモンガは喜んでいた所にスーラータンが来た。

迷わずクラツカーの洗礼を浴びせに行くるし★ふぁー、驚くスーラータン、その様を見て笑うモモンガ。

聞けばるし★ふぁーは偶々有休が取れたので朝っぱらからユグドラシルをうろうろし、稼いだお金でプレイヤー間のアイテム売買が出来る取引所に大量にあったクラツカーをこっそり買い込んだらしい。

そうして三人で、やがて四人、五人、六人で、次に来るのは誰かを予想しつつ皆でク

ラツカーを構えて待ちわびて。

ある程度人数が揃えば昔話に花が咲き、ムービーを展開したりして、それでもクラツカーを忘れなかつたりしつつ、嗚呼、黄金の記憶の何と美しい事かと言うウルベルトの眩きにたつち・みーが素直に同意したり。

そうだ。

たった独りで過ごしてきた時間が無駄にならなかつた。

あの全てはこの数時間の為と思えばむしろ良い思い出として昇華された。

アインズ・ウール・ゴウンの41人、その全員が揃うこの僅かな時の為と思えば。

「……………」

リアルの方で熱いものが頬を伝うのを鈴木悟は感じていた。

半接続状態にしてリアルの身体を動かし、デバイスのゴーグルを上げて涙を拭う。

「泣くのはサーバーダウン後で良いだろ、今は少しの時間だつて惜しいんだ」

眩いた後、ユグドラシルに再接続。

モモンガは皆が待つ宝物殿へと駆け足で戻って行った。



「——ん、戻って来るぞ」

探知に長けたチグリス・ユーフラテスさんが眩く。

「マジか」

「ギリギリだったなー」

「もう一回くらい練習したかったけどねえ〜」

要は移動のタイミングと配置の確認だけ。

後はアドリブという久し振りに行うには結構難易度の高そうな内容になったが、そこは当たって砕けようとの事。

モモンガさんの姿が見える頃には、金貨の山に腰かけたり金貨の山に登ったり金貨の山を掘ったりと如何にも暇を潰していました風を装っていた。

「何やってるんですかもー、お待たせしちゃいましたかね。それじゃ皆さんの装備返していきますから」

「うえーい」

戻って来たモモンガさんの周りに集まり、それぞれ自分の最高の装備を受け取る……いや、返して貰う。

「ふむ……うん、やつぱりこっちの方がしっくり来るな」

「懐かしいなーこれなー」

「なんだか……全員揃ってて、全員フル装備とかあの頃に戻ったみたいじゃん？」

「ハハハ、それは言ってもねえ」

「今宵は泡沫の夢、時間が来れば弾けて消える定めよな」

「おお寂しい寂しい」

「ま仕方ないね、だからこそなんだしね」

「……スキルの試し撃ち、したいなあ」

「やまいこさんそういうのはもう時間に余裕ないですから」

たちさんは純銀の聖騎士に、ウルベルトさんは伝説の魔術師に、ペロロンチーノさんは征空の王に……皆が往時の姿を取り戻せば、自然と場は盛り上がる。

とはいえ外見に殆ど変化がないメンバーもいた。

僕と茶釜さんだ。

まあ種族の関係上外装が変わるような物は装備できないが、例えばスライム系専用装備の最高峰である黒玉の核を内包している僕は、とりあえず物理で倒すのはほぼ不可能な存在な訳よ。

触った端から融かすからね。

神器級でもタダじゃすまないよ。フン。

でも鈍いので遠くから丁寧に魔法撃たれると完敗するけど。

……良いんだよそこにロマンがあるのだから。

「じゃ、玉座の間に行きますよー」

そしてモモンガさんの合図、だが次の瞬間警告音と共に視界に点滅する

【転移不能地域が指定されています】

の文。

数秒の沈黙を置いて、皆が思い出した。

そうだよあそこ直接行けないよ。

「モモンガさん？」

40名の視線が集中した。

「いやあ……ついうっかり……」

そういえばそうでしたと頭を搔く骸骨がおられる。

「改めて、えーつと……ソロモンの小さな鍵に行きましょう。あそこが一番近いですが
ら」

気を取り直し——今度はちゃんと転移出来た。

ドーム状の大広間、天井には煌びやかなクリスタル、壁には彫像の込められた鎮座ス
ペース。

玉座の間の手前に存在する此処は最終防衛ラインと言うべき場所だが、こんな所まで
攻めて来れるパーティーを殲滅出来るとは思っていない。

あくまで玉座の間に全員が揃うまでの時間稼ぎだ。

しかし……ナザリックの何処を見ても言える事だが、いくらユグドラシルがそういう事も出来るゲームとは言え頑張り過ぎたよなあ……どこのラストダンジョンだよ？

はい、プレイヤー間ではナザリックがラストダンジョン扱いでしたね思い出しました。

と、あれ？ スペースに空きがあるな……？

「やっぱ目立つなあ、ちゃんと作つとくべきだったかなあ」

「鉱山占拠したしレア金属でゴレム作る！ ソロモンの悪魔揃える！ とか言つてゴリ押しした後飽きたから止めるわーとかぬかしたお前の言う事じゃないな」

「全くだ、反省しろ反省」

「今更されてもそれはそれでギャグ未満だけどなー」

首を傾げていたらるし★ふあーさんにウルベルトさんとベルリバーさんとぼりあぶるさんの会話が耳に入った。

あーそういうえげそでした。

でも勢揃いまで後……五体？ と言う事を考えると、るし★ふあーさんにしては良く頑張つた方じゃないか？ 今見ても造型凄いし。

うっせうっせと文句を言うるし★ふあーさんを中心に笑い合う四人。

久し振りであつてもあの悪童達の調子は変わらないと言うか……別ゲーとかでも一

緒なのかな？

モモンガさんを先頭に41人でぞろぞろと玉座の間に向かう。

そして、聳え立つ玉座の間へ続く大扉。

どう見てもこの先にボスが待ってますよと言う圧倒的説得力を持ったその扉の前で、何故かモモンガさんは立ち止まっていた。

罨の類は無かったと思っただけどと言うか、黄金の杖を持つてるモモンガさんにナザリックが何か出来るとも思えないが。

やがてモモンガさんが扉を開く。

何事も無く開ききった。

「……あー良かった」

「どうしたの？ 何か仕掛けてあったっけ？」

「え？ ああいえ、もしかしたらこの扉の彫刻が動いたりとかするかなーって」

「そんな仕掛けがあるとは知らないが……」

「私もです。まあでも、これ彫ったのるし★ふあーさんですから」

モモンガさんの躊躇と安堵の理由を一人を除いて全員が納得した。

「ちよま、いくら俺でもそんな所までは余計な事しないって！ 聞けよ！ 目を逸らすなよー！」

るし★ふぁーさんが何か言っているが誰も信じない。

因果応報とはこの事か……ととても納得出来た。

改めてそろそろと玉座の間に入る。

「おお……」

誰のとも知れない感嘆の溜息。

いや、僕のものだったのかも知れない。

思えば此処にも随分と手間と時間をかけたものだった。

アインズ・ウール・ゴウンのメンバーそれぞれの旗は言うに及ばず、シャンデリアから絨毯、柱の一本一本に至るまで拘り抜き、玉座などデザイン確定だけで半年、素材集めに更に半年と馬鹿馬鹿しくなる事を良くもやったものだ。

「さてモモンガさん、そう言えば時間ももう後40分程と押し迫って来ているけど……あれ？」

「たっちさんが早速段取りを付けようとしたものの、何かに気付いたのか台詞が止まる。」

「何事かと皆がたっちさんの見ている方へ視線が向いた。」

「アルベド……」

誰かが呟く。

皆の視線に晒されているのは、玉座の脇に控える黒い翼と白の装いのコントラストが栄える美しいNPCだ。確かなザリック内のNPCを統括する設定が与えられていて、護衛特化ながら十分な戦闘能力を……ん？

「ああ」

たっちさんの台詞を途絶えさせた原因に気付く。

「ワールドアイテム……ギンヌン……なんだっけ。とにかく、アルベドにあれ持たせる設定なんてありましたっけ？」

「真なる無……何故アルベドが？」

僕の疑問をより率直にモモンガさんが繰り返す。

ただし、特定の方向を持たせていない僕と違い、モモンガさんはタブラさんの方を見ていたが。

やがてアルベドから自分に視線が集まった事に少々居心地を悪くしたのか、触手をぐねぐね動かしした後非常に言い辛そうにタブラさんは答えを言う。

「……いや……いつかの大規模討伐隊が来た時に、伝説のこんな事もあるのかとをやるかなーと思って。此処まで攻め込まれたならギルドとしてピンチではあるけど、そこに三重の絶対防御を持つアルベドが属性無視広範囲破壊を連打するという……魅せ場がね？」

「気持ちばかりですが……何で勝手にそんな」

「うん、だから……驚かせようと思つて。……いやもう許してくれ、今更こんな過去の過ちをこうして皆の前で自白しなきゃならないとかとんだ羞恥プレイだよ!? 勝手な行動はした! その後アルベドから回収するのを忘れてそのままにもした! 否定のしようもない! 嗚呼本当許してくれ、許してくれるね? お願いだ!」

タブラさん声が半泣きだ。

まあでも半泣きになりたくもなる。

立場が同じなら僕だって半泣きどころか土下座くらいしただろうさ。

メンバー全員からの生温い視線とか耐えられる訳が無い。

「分かりました、分かりましたから。……タブラ・スマラグディナ、お前の全てを許そう!」

「ありがたき幸せーッ!」

宥めつつ、突如RPを混ぜるモモンガさん。

爆笑が起こった。

普段喋りから突然イケメンボイスRPを織り込んで来るのは、ウケ狙いにおける彼の鉄板の一つで、久し振りに聞いたその破壊力と言ったら……凄いな!

おまけにタブラさんが即行で頭下げた事も笑いに拍車をかけている。

やはり多少おどけでもしないとさっきの空気はキツいか。

キツかったね、余りにも。

「あー笑い過ぎてちよつと涙出て来た……えつとじゃあどうします？ 真なる無」

「持たせたままで良いんじゃないか？ 回収した所で今更ねえ」

「タブラさんの言う事も分からないでもないし」

「こんな事もあるうかと、は一度はやってみたいしな」

等と話す内にふと茶釜さんがモモンガさんに言った。

「……あれ？ モモンガさんも今気付いたって事は、て言うか扉の時もだけど、玉座の間に入ったのどれくらい振りなの？」

「ああそれは……まあ、皆さんと同じくらい振りになりますかね……」

「モモンガさん、さては円卓と宝物殿くらいしかまともに入入りしてなかったり？」

「や、まあ、その……特にする事ありませんでした、し？」

「……あ、なんかごめん……」

「いやいやいや良いんですってば、私が好きで続けていた事なんですし、他の皆さんはそれぞれ多忙だったんですから」

「うん……そうだけど、うん」

「姉ちゃんたら何やってんのさもー。迂闊な事聞くと精神反射食らうなんて円卓の間で散々分かつてるじゃん」

「ぐぐ、仕方ないでしょーが」

茶釜さんが珍しく藪蛇をやらかし、更に珍しい事にペロロンチーノさんがフォローをしている。

でも本当、ちよつとでも良いから怒ってくれないかなモモンガさん。

「私としては、こーうして最後に皆と話す事が出来ただけでも嬉しいんだけどな……」
はい今全体無差別耐性貫通精神攻撃来ましたよ。

これで攻性自覚が欠片も無く、罪悪感にじわり苛まれるこちら側へのフォローのつもりなんだから余計ダメージの倍率が酷い。

理由事情に依らず、皆が長らく不在を続けていたけど独りで頑張っていましたなんて言う状態をスルー出来る訳が無いと言うのに。

いや、これで実はモモンガさんが物凄いサディストだとしたらそれはそれでその隠された牙の鋭さに戦慄する所なただけど。

流石にそれはな。

うん。

いくらなんでもな。

うん。

「ま、まあとりあえず写真撮ろう写真！ 並ぼうぜーほらほら」

とにかくこれ以上モモンガさんを喋らせ続けると危ないのは誰だって分かる為、ペロロンチーノさんが皆をどンドン促す。

順序が狂った事にたっちさんが若干何か言いたげだったものの、ペロロンチーノさんに悪気が無い以上仕方ない所。

「アルベドは、えー……あそこで待機。で、お」

「おおー歩いてった歩いてった……止まった止まった」

「歩く姿も綺麗だねー、あれもAI組の技かねえ」

「確かシステムデフォルトだとうっさんくさい動きになるからそこはやっぱりね」

「あ、モモンガさんは玉座に座ろうねえ」

「さ、ギルド長」

「はいはい、分かりましたよもう」

「他順番とかどうするよー?」

「玉座中心に大体で固まってればいいだろ」

「じゃあ俺玉座の上な」

「降りろクズ野郎」

そんなこんなで総員配置につけば、珍しくやまいこさんが真っ先に撮影ツールを起動したので彼女主導で撮影する事に。

「じゃ、じゃあ……これで……うん、アインズ・ウール？」
『ゴウン!』

ちゃんとしたのを一枚、そしておふぎけを何枚か。

やっぱり最後の記念となるものがちゃんと残るのは良いものだね。

「えっと、複製して皆の所に送っておいたから……」

「はい確認しました」

「これだけ見るとどこのラスボス親睦会だよって感じだな……」

「あっそうだ、折角だしアルベドも混ぜようぜー」

「じゃあプレアデスも呼んでこようよ。確か十階層担当でしょあの家令とメイド達」

「それなら私が呼んで来ましょう」

「はっや」

そういう流れになったのでたっちさんが^{ライトニングスピード}疾風迅雷のスキルまで使って高速で玉座の間から消えて行った。

まあここに転移で直接来れない以上、迎えに行くなら足が速い人の方が良いんだろうけど。

でも戻るのはどうするんだろう、あの速度に……セバスはともかくメイド達は追隨出来ないだろうし……ま流石に加減するか。

「あっそうだモモンガさん、ちょっとアルベドの設定見てもらえますか？」

ふとタブラさんがそんな事を言った。

「え？ はあ……えーと、アルベドアルベド……うわお」

急な事に少し不思議そうにした後、モモンガさんはコンソールを操作してアルベドの設定を表示させたら変な声を出す。

それに反応した面々もそれぞれアルベドの設定を呼び出し、方々で驚いた様な呆れた様な、そんな声が随所で漏れる。

「えっと、これ……この長……まだスクロールが終わらない!？」

「あー……」

誰であろうタブラ・スマラグデイナの記した設定となれば、とりあえず限界一杯まで詰め込まれるのは必然で、更にそれに合わせた挙動を要求されるのでAI組としては勘弁してくれと言うのが正直な所だった。要約に要約を重ねさせたのも今となっては良い思い出だな……。

等と思いつながら僕もアルベドの設定をスクロール、と言うか面倒なので最下段まで飛ばす。

——そう、アルベドはモモンガの嫁なのだ（予定）。

「あ？」

最後の行を見た僕は不可解なその内容に疑問の声を出す。

僕に限らず設定を見た皆が不思議な声を出した。

不意打ちと言う点でこれ以上のものは中々無いんじゃないか。

「すいませんタブラさんこれは」

「いや実は思う所ありまして円卓でモモンガさんと久し振りに会った後、多少設定の見直しをしまして」

「はあ」

「で、折角だしこういうのもどうかなど。ギルドNPC最上位とギルド長のカップリングとか妥当じゃないですかね」

「すいませんが何を言ってるんだあなたは」

「ご迷惑ですかね？」

「えっ？」

「モモンガさんが迷惑でないなら……問題は無いでしょう？」

「いやそれは……でも急と言うか、一言も無くいきなりこんな……」

「それについては申し訳なく思います。でも最後の機会、可愛い娘の一人を預けるならばと考えると自然と……」

問い質しにかかったと思っただけ押し返されてそのまま押し切られそうなモモンガさ

んが居た。

皆が設定に驚きと言うかドン引きと言うかして間にさりげなくアルベドをモモンガさんの側まで移動させているタブラさんは本当何て言うか……余り言いたくはないが……。

でもゲームシステムで考えるとPCとNPCの結婚自体はそう珍しくもないんだよな。

独身でいるよりは結婚している方がメリットあるし、自分のお気に入りの塊でもあるNPCを伴侶にまじしようって言うプレイヤーは少なくない。

PC同士の結婚だと後で拗れて人間関係が面倒になったりとか離婚すると暫く頭上にバツイチマークが表示されるとかデメリットも多々あるが、相手がNPCならそのリスクはゼロ。結婚に必要なアイテムを揃える事やイベントをこなすのもよりスムーズときた。

これが強者になると異性アバターで異性NPCと結婚する倒錯系プレイヤーも居たりする。ジェンダーフリーも良し悪しだ。

と言うかNPC嫁にしてる奴アインズ・ウール・ゴウンにも何人か居たな。

正直そこまでキャラに愛着持てるのも凄いなと素直に感心したものだけ……ああ、ペロロンチーノさんも茶釜さんが居なければシャルティアを嫁にしただろうなあ聞

「違う。」

「ほら、並んで立つとびつくりするくらいお似合い」

「そうですかね……?」

「あら本当、魔王と魔妃とかそんな感じ」

「ほほう、これは確かに……」

そして気付けば玉座から立ち上がったモモンガさんのすぐ隣にアルベドが居り、その様をタブラさん達が楽しげに眺める形が出来上がっていた。

これが実際驚くほどお似合いに見えるから凄い。

タブラさんこれ最初からその腹積もりだったんじゃないやあ?　　つてくらい。

「……タブラさん」

「なんでしようかモモンガさん」

「断らせる気ないですよね?」

「なんです?」

「娘が何て言いますかねこんな」

「親の決めた相手に文句を言うような娘じゃないですから」

「だからってそんな、大体ちゃんとイベントとかこなす時間も」

「よろしいんじゃないですかね」

「……………こういう土壇場をそれで押し切ろうとするのはどうかと思いますよ」

「よろしいんじゃないですかね」

「タブラさん……………」

「よろしいんじゃないですかね」

「……………ああもう、分かりました、分かりましたとも。さつき許した所ですし」

絶対一步も引かない壊れたレコードモードに入ったタブラさんに即行でモモンガさんが折れた。

まあ本気で嫌って訳じゃないだろうし、それに場の雰囲気は『その方が面白そうだし良いんじゃない?』にシフトしているのでここで断るのも難易度が物凄いだろうし、あんなったタブラさんを説得出来たのはアインズ・ウール・ゴウンでも一人だけなのだし。

「それじゃあ、モモンガさんの手でその(予定)の部分削除して貰えます?」

あーあの(予定)ってその為の。

笑顔アイコンまで発しながらのタブラさんの言葉に、モモンガさんは溜息。

然る後黄金の杖を使い設定の変更を始めた。

「……………これで良いですか?」

モモンガさんが確認を求めれば、アルベドの設定を開いていた全員が開き直す。

「(い)、(い)これは……………」

「おおー」

「ひゅーひゅー」

「モモちゃんやるじゃーん」

「言われたからじゃなくて自分の意志だつて主張……Goodだね！」

「これにはアルベドもガチで惚れちゃうわー」

「成る程……こう来たか……」

それぞれの感想が溢れ出た。

なにせ（予定）が（決定）になつていたので。

ただ消すだけかと思えばモモンガさんなりに工夫を凝らしてきた訳で、これにはタバ
ラさんも五体投地。

「モモンガさんの御厚意には本当頭が下がります」

「だからつて倒れ込む事はないでしょう、ほら、娘が見てますよお義父さん」

「……………」

お義父さんと言われたタバラさんがいやにゆっくり身を起こし、立ち上がる。

「どうしたんですかお義父さん」

「……そう来たか」

「そりや来ますよ、アルベドがタバラさんの娘ならアルベドと結婚した私とタバラさん

は義理の親子関係になる訳でしょうか？」

「そこまで考えてなかった……！ あっこれちよつと物凄く辛い、ヤバい、ギルド長ギルド長、確かに娘はあなたへ嫁にやりましたがそこであなたが私を義父と呼ぶのは畏れ多く、いつも通りの呼び方で留め置き下さりませんかでしょうか？」

「それは出来ない相談だな、タブラ・スマラグディナ——我が義父よ」
「ぐほあああッあッあああああッ!!」

突然RP始めたと思つたら床に転がりのたうち始めるタブラさん。

モモンガさんからこういうクロスカウンターが来る事は全く予想していなかったらしい。

真なる無の件と云い、その時々『きつとこうすれば凄く楽しいに違いない』に全振りする余り周りが見えない傾向が幾つか思い出せた。ニグレドとか。

そして久し振りのユグドラシルで舞い上がってる分も含めてかつてなく迂闊とか粗忽と言うか……そっかー、タブラさんも萌えキャラだったかー、参ったなー、まともな方の人だと思つてたのになー。

冷静に考える事が出来れば、アルベドの設定弄つたのに真なる無をほつたらかしにするとか普通ありえないしなー。

「ただいま……つてどうしたんだこの状況は」

そしてこのタイミングでNPC達を連れて戻ってくるたっちさん。

聖騎士、家令、メイド六人が一列に並んで歩いてくるって言うのはシユールだね。

「タブラさんの薦めでモモンガさんとアルベドが結婚したんですよ」

「えっ」

「で、タブラさんはモモンガさんにお義父さん言われて大ダメージ」

「酷い自爆もあつたものだよねえ」

「へえ……それはそれは……まあ、モモンガさん……おめでどう？」

「どーも」

何人かから概要を聞いて納得しつつ、転がりまわるタブラさんへ一瞥をくれた後たっちさんはモモンガさんを祝福する。

気持ちは分からなくもないけど返事の棒読みっぷり凄いな！

「ともあれプレアデスも揃ったなら改めて撮影だな。よーし並べ並べー」

「ほらタブラさん起きて、それともそのままの姿を永遠に残す？」

「ぐむう……い、今蘇った……ぞ」

「それでこそ我が義父だ、タブラ・スマラグティナ」

「ぎゃぼっはあおあぐあががが！」

「モモンガさんも止めて差し上げろ」

「すみません、つい」

「えーとセバスは……そこで待機、被写真撮影モード、カメラはあそこ。でーメイド達は……最初は固まって後は製作者の傍に立たせるか？」

「そうしょ」

「異論は無い」

「ほーらタブラサーン、再起動再起動、娘さんが見てるよ〜」

「ふ……つく、ぐ、うぐぐ……！ アルベド、不甲斐ない父を許せ、後の事はニグレドとよく相談し、ルベドの処遇については——」

「いーからはよ起きろや！」

「くツ、心のバッドステータス治癒は大変なんだぞ!？」

「いーからいーから」

「がんばれ」

「が、がんばるぞー」

たっちゃん達があればこれ配置について話す間、懸命の努力により再起動を果たしたタブラさんが戦列に復帰。

これで再びの写真撮影が恙無く行われる流れに……いやーおかしいよね、集合写真撮ろうってだけなのに色々起こり過ぎだよね。約40人も居れば仕方ないか？

まず一枚、配置換えしてもう何枚か。

さつきと同じような感じでやまいこさんから画像データが回って来るのでローカルに保存保存。

「あ、そうだモモンガさん。そろそろ時間も押してきましたし、折角だから少しロールプレイに付き合つて貰えませんか？」

ファイル名どうしようかなーと軽く悩んでいたらたちさんが切り出していた。

視界の右上、時刻を見れば成る程確かに強引にいかないと残り時間が大変危ない。

「ロールプレイですか？ 構いませんが……」

「ありがとうございます。じゃあ、アルベド、セバス達は……部屋の出入り口付近まで移動して待機、その後平伏せ」

玉座に座つたまま少し不思議そうにしつつモモンガさんがオツケー出せば、流れる様にNPCには退いて頂く。邪魔とまでは言わないけどやっぱりね。

アルベド達が扉の前で一列横隊に並び、揃つて平伏したのを確認後たちさんは右拳を天へ突き挙げる。

「アインズ・ウール・ゴウンよ永遠なれ！」

『永遠なれ！』

一人の合図、39の唱和。

残る一人を置いて40人は駆け足気味に移動をし、最初の九人からモモンガさんを引いた八人を最前列に玉座の前で五列横隊。整列後、一斉に跪くなり屈むなりして忠義を示す。

この動きに最初は驚いた風だったモモンガさんも、整列が終わる頃にはロールプレイに頭が切り替わっている。

「ほう……今からどのような出し物を見せてくれるのかな？　我が同胞達よ」

闇色の後光まで背負ってノリノリだ。

それならこつちもしつかりやらなきやな、と言う訳でウルベルトさんがまず顔を上げる。

「我等アインズ・ウール・ゴウンが長、モモンガよ」

「なにかな？　最強の魔術師、ワードナたるウルベルトよ」

「よくぞ今まで我らが築き上げたナザリック地下大墳墓を維持し続けてくれた。ここにはユグドラシルでの全てが詰まっている、背を向けた身ではあるが、心から嬉しく思う」「それか……だが案ずる事は無い、ギルド長としてすべき当然の事を成したままであり、皆には皆の事情もあるだろう」

「……モモンガさん」

「どうした？　我が友、ペロロンチーノさん」

「今日、正直ここに居られるとは思ってもみなかった。でー、年月を経て尚変わらなかったこの世界を再び味わわせてくれて、その、本当、ありがとう」

「礼には及ばないさ。……私は場を用意し、皆を呼んだまで。応えてくれた皆には私の方から礼を言いたいくらいだ」

「モモンガお兄ちゃん！」

「つく……！ んん、相変わらずだな、ぶくぶく茶釜さん」

「えへへ、あのね？ もう何回も言ったけど、でもやっぱり皆言いたらないの。だから、モモンガさん。今日のあの数時間、あれを皆と過ごせたのは一生の内でも何回も無い、とても大切で宝石のような時間だった。……ありがとう、そして、ごめんなさい」

「……良いのだ。確かに私が過ごした孤独は長かったが、それは私が選んだ道。とはいえ……ぶくぶく茶釜さん、そして皆の全てを許そう。今日と言う日に私は満足しているのだから」

「さてギルド長よ」

「ふむ建御雷よ、如何した」

「許されて尚我等の気は済まぬ故、煩わしく思われるだろうが敢えて申し上げる。感謝を。そして……終焉の時に於いて尚色褪せぬこの世界が永く語り継がれん事を」

「うむ……。ユグドラシルにて生じた数々の伝説は様々な媒体を通じ残り続ける事にな

るだろう。そしてその伝説には少なからずアインズ・ウール・ゴウンの名も語られる事は疑う余地も無いだろうな……」

「我が娘の夫にしてギルド長、モモンガさん」

「あれは実に急な話ではあったがな、タブラさん」

「思えば様々な事があり、様々に迷惑をかけた様に思う。だが、それも良い思い出として昇華されたものと信じる。……そして、アルベドの事をよろしく願います。あれは私に似ている面も多々あるかも知れないが、それでも私がこの世界で特に心血を注いだ三姉妹の一人、どこの誰に嫁にやつても恥ずかしくは無いと言う自負はある。だから」

「ああ、良いとも、他ならぬタブラさんの頼みだ。アルベドの事は任せよ」

「モモンガさん」

「なんでしよう、たっち・みーさん」

「思えば、あの時私があなただを助け、仲間に引き合わせ……そして、ここに至るとは思ってもみませんでした。……ユグドラシルをこのギルドで過ごす事が出来たと言うのは、私の密やかな自慢の一つです」

「……確かに、あの時あなたに助けられなければ私は、そしてこのアインズ・ウール・ゴウンは存在しなかったかも知れない。そういう意味で、あなたはギルドの父と言えるの

だろうな」

——それぞれに思う所があつて、言葉を交わす。

モモンガさんは大変かも知れないが、でもきつと喜んでもいるだろう。

ロールプレイをしようかと誘つてロールプレイしているのはウルベルトさんとモモンガさんくらいなものだけど、それはもう些末な事だ。

ユグドラシルは今日でおしまい。なら、ギルドメンバーとちよつとずつでも最後の言葉を交わすのは大事な事だから。

ユグドラシルから引退していたり、ユグドラシルの事を忘れていたりした僕等がその間ずつと独りで頑張つていたモモンガさんにアインズ・ウール・ゴウンのメンバーとして何か言えるものでも無いけれど、それでもやつぱり、この儀式めいたやりとりを通してユグドラシルの終わりを迎えるのは、きつと重要だ。

ひよつとしたらモモンガさんは独りのままこの時を迎える事もあつたかも知れないと思うと、もう本当、来てよかつたと感じる。

ただこれで十年前くらいなら眠気も吹き飛んでいるだろうに、今現在ぶつちやけちよー眠いのが我ながら失笑を禁じ得ないんだけども。

ま、僕の発言順は最後に来たからという事で最後だから、寝る訳にはいかないんだけどね。

さて……後五人くらいか？ 変な事言わないようにしな……

あ？

「ちよ」

信じられないものが視界に映っていて、思わず声が出てしまう。

おい空気読めよ馬鹿って視線がいつそ物理的かってくらいに自分に突き刺さるが、そんな事はどうでもいい。

「待って待って待って、今何時?!」

「え？」

「へ？」

「……おい」

「えっこれマジ？」

「おいおいおいおい」

「台無しじゃねーかどうなってんだ」

「終了と同時に続編始まる類のアナウンス無かったよね？」

「なんも無かった筈だけど」

「延期も聞いてないしな……」

場が騒然となる。

それもそうだ。

だってサーバーダウンの時間過ぎてるんだもの。

本来ならユグドラシルが終わってしまっていて、言いそびれたメンバーは後で適当に悪態を吐きながらモモンガさんに言いたかった事をメールにして送ろうとしてる筈なのに。

と言うかあれ？

コンソール出ない？

見れば周りの何人かも宙を突っついては首を傾げている。

「どういう事だー！」

玉座から立ち上がりながらのモモンガさんの怒声。

一気に場が静まり返る。

「コンソールが出なければGMコールも利かない。一体どういう状況なんだ……！」

怒りに拳を震わせるモモンガさんだが、それに対する答えなんてこの場の誰も持ちっ
ちやいない。

全員がこの状況に混乱しつつあったのだ、が。

「どうなさいましたか!?!」

緊迫した女性の声が玉座の間に響く。

聞いた事の無い声、それも僕等の後ろからだ。

骨だから表情なんて分からない筈だが、呆然としているのが分かるモモンガさんの顔。いつから顎外れるようになったの？

振り返ってみれば、成る程、そこにはアルベドが顔を上げ、極めて心配そうな表情でこちらを見つめていた。

「アルベ、ド……?」

「はい、モモンガ様」

ざわ、と再び場がどよめく。

「なんだあれは」

「アルベドだろう」

「喋っているし表情が動いているぞ。データの膨大過ぎるだろあんなの」

「いくら運営でもあそこまでは常識的にやらないと言うか、不可能だな」

「と言うかアルベドの後ろ、セバス達も何か凄い心配そう……いやちよつと不思議そう? にこつち見てるじゃんツ!」

「むう……」

「あーもー訳分かんないなにこれどうなってるのー?」

「大体……あ?」

「んむっ？」

「…………おおっ？」

混乱が混乱を呼ぶ最中、ふと僕を含めて全員の挙動が一旦止まる。

なんだろう…………無理やり鎮静剤打たれた様な…………不自然に冷静になった様な…………。

そこに数度の乾いた柏手の音が響く。

「よし、まあ諸君、落ち着こうか、落ち着いている様だがね」

「朱雀さん」

年長者の貫禄とでも言うべきか、この訳の分からない事態に対し真っ先に対応をしようとして動き始めたの…………かな？

「アルベドも心配させて済まないね？ 少々驚くべき事態が発生した様で取り乱してしまっただけ」

「い、いえとんでも御座いません！ 元より私程度の身が至高の御方々の心配などおこがましい事ですので…………」

朱雀さんがNPCと普通に会話してらっしやるぞ。

「ふむ。さて諸君、唐突で恐縮だが…………どうやら我々はユグドラシルに囚われたか、全く未知の何処かに攫われた可能性がある」

そしてとんでもない事を仰った。

本来なら一笑に付す所なんだけど……。

「……マジですか？」

モモンガさんの素の言葉を誰も否定できない。

「そうか……成る程……」

それどころかぶにつと萌えさんが肯定の意を示したのだ。

どよめきはするが、それは困惑一色ではなくそれなりに納得の色も窺えるもの。

他ならぬこの二人が同一見解を示しつつあるこの異常な事態。

一体、何がどうなってしまったんだ？



—— いやあ、ね。参ったよ本当。

こんな事が実際に起こり得るのか、って。

まあ実際に起こった訳だけ。

あの時朱雀さんやぶにつと萌えさんが真っ先に動かなかつたらどうなっていたやら。

朱雀さん、皆の前で「さて」と言い

ん？ ……ああ、例の……彼から懐かしい話を聞いたかね、成程成程。

であれば、次に私の所に来るのは自明と言えようね。

さてさて……そうだね、んー……あの頃は……ふむ、ああありがとう。

そう、実はだね、へ口へ口君が頓狂な声を出す前に私は異常に気付いていてだね――



ナザリック地下大墳墓は第十階層、玉座の間において確かにゲームとの別れを共有しようとしていたのだが――何故かそれは叶わなかった。

皆がざわつく最中、立ち上がって両手を腰に当て、上体を反らす。

軽くだが、恐る恐る。

果たしてこの行為に痛みや違和感も無く、実感としてこの体はその様に動いた。

うむ。

完全におかしい。

以前リアルで咄嗟にゲーム感覚な動きをしたら腰を派手にやっつてしまい、ゲームプレイにすら支障が出る有様になってしまった筈なのに。

不幸中の幸いとして孫は怪我をせずに済んだが、現実の肉体が仮想に与える影響の検証という名目すら家族の猛反対を受けた事で、その日以来私はユグドラシルにログイン出来ずにいたのだ。

今日とて最後の日ぐらい不誠実な別れをした旧友達に会わせてくれ、と妻と息子に散々も散々に頼み込んで実現したというのに。

しかして今、私は上体を反らす事に成功している。

それも一切の痛みも無く。

極めて異常だ。

実際の所跪く姿勢すらちと辛い所があったと言うのに、急に何事もなくなっただけだからもうその時点で違和感の凄まじい事と叫びたらない。

挙句試しに立ってみてもその過程に痛みは無く、反らしてみれば全く無事。

記憶の通りならそんな動きをした時点で声を我慢する事もできない痛みが出、リアルの肉体は脂汗塗れで椅子が酷い事になる。仮想の体を動かしたただけであっても、だ。

率直に訳が分からない事態なのだが、思考が回るに連れて自分の体という認識も訳が分かっていった頃と比べて何やら異質に感じつつあった。

外見こそ黒系色で統一されたパスト医師風の装いだ、これは仮初の姿であり、その気になれば数多の翼を持つ赤眼純白の矮軀を本性として顕現させる事は容易い。

……何が容易い、だ。

だがそういう確信が確かにあり、その事に対する違和感はあるが、自分がそうである事に疑う意識は無い。

つまり……違和感がある事に違和感を覚えているのかね、私は。

「ううむむ……」

中々に脳が痒くなる事態だが、現に私は私として自分の有様を許容しつつ違和感を抱いているのだ。気持ち悪い。

確か、そう確かにユグドラシルの死獣天朱雀であればこれは当たり前、なのだが。ううむむ。

地味な黒革手袋に包まれた己の仮初の右手を見る。

五指が思った通り自在に動く。当たり前だが、動いてしまう。

そして少なくともそう見えてもいる。

この異常なまでの一体感は一瞬までのゲームのそれとは大きく異なっていた。

まさかこれは触覚の制限が外れているとでも……？

舌を軽く口の中で動かしてみれば、人ならぬ己の歯を己の舌が実に精緻に舐め滑る。

……いやはや、電腦法が施行されて久しい現代でとても許される事ではないな。

それに……気のせいではなければ嗅覚と味覚もあるのではないか？

だがこちらは不可能と言って良い筈だ。触覚についてはやろうと思えば出来るにしても、普段ゲームとは完全に遮断されている筈の嗅覚と味覚を再現するだなんて、狂気の沙汰。以前から研究を進めでもしているならまだしも、いや、致命的リスクを負ってまでする事ではない。

となるとだ、この状況は……つまり……？

飛躍した閃きが脳裏を過ぎるのを止められよう筈もない。

「……しかし、だがまさかではないなら……う？」

ペストマスクの嘴を撫でつつ、喧騒の中かき消された呟き。

思考の一端を言の葉に載せるのは思考を纏めるのに有意義だが、そちらへ思考を偏らせてしまいかねない欠点を持つ。

が少なくとも現状においてはどちらでもいいから仮説の筋道を立てる必要がある。

そう、如何に観察と実験で得た証拠から検証すべきと言えど、一先ずの縁は必要だ。その後の検証でこれが否定されたならむしろ喜ぶべきであるし。

されども……。

在るべき痛みのみを失せた仮初の体。

本性を隠したそれを自分の意思通り自在に動かせる現状。当たり前のように在る五感。

そういえばG U I が視界に無い。

コンソールも開かない。

そして——嗚呼、自分ができる事を当たり前のように受け入れてしまっている認識。

何せ私は今魔法が使えるという確信がある。

M P の総量も自覚してしまえている。

……試し打ちはまあ控えるとして。

それに私が以前祝福を与えた者達が今何処で何をしているかも大まかに分かっただけ。まえる。

ああ、つまり現状このナザリック地下大墳墓の、少なくとも第十層は存在していると考えられるのか。

全く考えれば考える程に、今私は死獣天朱雀そのものだな。……恐らく。

そして腰の痛みが消えた時点からそうなのだろう。……か？

何かしらの予兆やそれを感じさせる事象がまるで無かった事は気がかりだが……フィクションの経験と現実のそれは別物としても……或いは認識外で何かあったのだ

ろうか……。

「どうなさいましたか!？」

ふと静かになったかと思えば突如聞き覚えの無い声が響き渡った。

何事かと視線を巡らせると、アルベドが跪いた姿勢のまま顔を上げこちらを見ている。

まるで生きているかのような挙動、いや、生きているのか。……うん？

「アルベ、ド……?！」

「はい、モモンガ様」

呆然とモモンガ君が彼女の名を口にすれば、当然の様に応えがある。

ではあれはアルベドという事になる。何しろ反証の材料が無い。

ゲーム上のプログラムから生成されたとはとても思えない有様だが、あれはアルベドなのだ。

……む、待て、少し待て。

私含めて皆随分目が良いようだが、この距離をなんの拡大も無く自然にアルベドの表情が読み取れているのはおかしくはないか。

状況の変遷に皆そこまで頭が回っていない様だが、いや私とて大差ないだろうが、しかしこんな事があり得るのか？ 本当に先程からそればかりだが。

へ口へ口君が騒ぐ少し前辺りから私は、そして我々はユグドラシルに呑み込まれた？いや、たかがDMMORPG如きをどうアクロバティックに解釈した所で外部のプレイヤーを組み込む様な真似は不可能だ。営利誘拐なんてレベルでは無い。

何より世に出回るとの端末にもそこまでの機能は無い。そも持たせるだけの技術も無い。

黎明期の都市伝説でもあるまいに。

それにアルベドの様子がユグドラシルを越えてしまっているのだ。

しかし現状として私は死獣天朱雀である。そこはもう覆り様が無いかの如く思える程にも確信済み。何故だかね。

であれば私以外の皆はどうなのか、向こうにいるNPC達も含め確かめなければなるまいが……。

と、折良く何やら静まった様だし、始めようか。

「よし、まあ諸君、落ち着こうか、落ち着いている様だがね」

数度の柏手を挟み、皆の意識と注目を集める。

不安げに私の名を呼ぶ者、不可思議な顔をしている者、そも表情が窺えそうにない者、様々だ。

それでも異形の身のそれぞれがそれぞれをしつかりと自己認識し、拒絶反応も無く今

までの様な個々として在るのは異常事態にしても度が過ぎている。

ともかく次だ。

皆から遠く跪く彼女の方へ顔を向け。

「アルベドも心配させて済まないね？ 少々驚くべき事態が発生した様で取り乱してしまつた」

「い、いえとんでも御座いません！ 元より私程度の身が至高の御方々の心配などおこがましい事ですので……」

成程、会話が成立してしまつた。

モモンガ君のそれは名を呼べば応えるという単純なものだつたが、今回はこちらの言葉に返事をするばかりか恐縮し再び頭を垂れるまでやつてのけたのだ。

これがユグドラシルの範疇なら、概ね似た状況と先程の私の問いを大雑把にでも予測して彼女に行動とセリフを設定していなければ出ない反応となる。

いくらタブラ君でもそこまでの真似はするまい。……するまいか？ いやするまいよ、流星に。

ならば……ううむむ。

これは、良い方か悪い方かどちらに受け止めるべきか甚だ迷うな。

ともかく言うべき事は言わねばなるまい。

再び皆の方へ顔を戻し、バラエティに富んだ全員の姿を個々に見。

「ふむ。さて諸君、唐突で恐縮だが……どうやら我々はユグドラシルに囚われたか、全く未知の何処かに攫われた可能性がある」

これにまたどよめきが起こるかと思つたが静かなものだ。

皆も薄々思う所があつたらしいのか、もしくは私が何を言つたか理解するのに時間がかかっているのか、ともかく様子を見ようというのか。

「……マジですか？」

モモンガ君の実に素直な反応に、私もそう言いたくあると苦笑しそうになる。

「そうか……成程……」

一方で私の言に理解を示したのはぶに君だ。

まあ彼であればそう来るだろう。

こういう手合いの思考実験……という程でもないが、まあ戯れに付き合わせた事もあ
るし。

「続きを述べても？」

皆に問いかける。

その際正確には自分の手ではない自分の手が自分の側頭部辺りを撫でる様にしてい
る事に気付き、嗚呼これは、現状でかけてもいない眼鏡を上げる仕草をしているのは、私

が私であつて必ずしも死獣天朱雀ではない証明と言えるか。

……もしくはユグドラシルの死獣天朱雀の癖として再現しているだけかも知れないが、現状では悲観より楽観を取りたいものだ。

一人で少し嬉しくなっていると、誰からも言葉は無く、誰からも続きを求められていた。

「ん、ならば先の発言の根拠を並べて君等を満足させる必要があるが、これについては私があるこれ言うよりまず君等自身で納得して貰った方が早いだろう。あ……どうだね、今の君等は自分の体を自在に動かす事が敵うかね」

問いに対する皆の答えは当然行動だ。

腕を伸ばし伸ばして天井に触れる者、翼やら何やら目一杯広げる者、膨張と収縮を繰り返す者、腕を格納し別の腕を伸ばす者、普通にストレッチをする者、好奇心のまま動く者、銘々様々だ。

「敵うかね」

程々の所でもう一度問う。

応えはそれぞれだが中身は同じ、肯定だった。

「であれば我々はユグドラシルに囚われたのではなく、その上でユグドラシルのそれぞれとして全く未知の何処かに攫われた可能性が極めて大となる」

「え、なんで」

「何故なら」

問うた式式君の方を見つつ言葉が続ける。

「人間の脳は人間の体を動かす事には長けるが、違う体を実際に動かそうとすると実に下手でね。これはDMMOの前身の更に基礎的な技術の研究中に明らかになった事で、考えてみれば当然なのだが、個々に差はあれども訓練もなしにいきなりだと過負荷により廃人化もあり得る。しかし君等は実に見事に自分の体を操って見せ、何ら違和感も無いらしい。……この時点でも我々はユグドラシルのプレイヤーである人間ではなく、ユグドラシルに存在したそれぞれであるという仮説が成り立ってしまった」

「……まあ確かに、視界にGUIもないしコンソールも開かない。ユグドラシルであるならあるべきアナウンスも未だに無い。教授に一理ありますか」

「だろう」

今度は肩を竦めるオードル卿の方へ顔を向け。

「ただ念の為更なる確認は必要だとなるか。ここがもしまだユグドラシルであるのなら、今頃運営は事態の対処に追われているだろうが……旧オマーン国際空港」

「はア？」

脈絡がないかに思えた私の発言に、私の正気を疑うような疑問詞が突き刺さる。

気持ちには分かるが茶釜君の声は刺激が過ぎるな。咄嗟に謝りそうになる。

「……何も起きないか」

可能な限り平静を装って、悲しくも予想通りの展開に溜息を零す。

「あ、そうか。禁句ですね？」

説明しない私も私ではあるが、気付いてくれてありがとうとたつち君。

そして理解が広がれば皆も口を開きやすくなる。

「そういうや特定ワード喋ったら警告なり一発拉致なりで何かしらGMからアクションある筈だもんなあ」

「朱雀さん止めて下さいよいきなり捻じ込んでくるの」

「警告自体は自動で飛んでくる筈だったっけ？」

「うーんでも確かになんにも起きないとなると……」

「キンタマーニは？」

「おいよせギリギリを探ろうとするんじゃない。運営のガバ裁定にプレイヤーは無力なんだから」

「あーそういうえば……運営の裁量に疑義を呈したプレイヤー側が蜂起した事あったねえ」

「そんなまともつぽく言つて良いもんじゃないだろあのバカ騒ぎ」

「第五次BAN祭りからの第三次土下座祭りの発端だったか」

「あの時は上位ギルドのギルマスも結構やられてたらしいからねえ」

「このゲーム馬鹿しかいねえなって良いもの笑いの種だったなあ」

小さくだが笑いが溢れる。尚その馬鹿の中にアインズ・ウール・ゴウンのメンバーが10人ばかり含まれていたのはあえて誰も指摘しない事だし、該当者は笑っていない。しかしこう盛り上がりつつも何のリアクションが無いのは改めてやはりと言うべきか。先の見通しの立たなさに溜息の一つも零れよう。

「じゃあレマン湖ー」

次へと行こうとしたらペロロンチーノ君が実に元気の良い発言をしでかした。

「おいお前」

当然姉の茶釜君が許さない。

「ちよつ違！ 姉ちゃん！ 俺は教授を手伝っただけだって！」

「やかましいわ」

問答無用といった風に茶釜君が手にした盾でペロロンチーノ君を殴打する。

「いった!?! いきなりはやめてくれよ姉ちゃん！」

「じゃれ合いはともかくこれもGMスルーかあ……」

「んんー？ ちよつと待つて？ 今茶釜さんがペロロンチーノさんに攻撃したけどダ

メージ表記なかったね？」

姉弟のじゃれ合いは相変わらずの事と生暖かく放置していたが、そこは流石にぶに君。実に素晴らしい着眼点だ。

「えーそうだった？ おりゃ」

そして流れる様に確認をしてくれる茶釜君については見事の一語に尽きる。

改めて皆の見える前に確認に彼女は弟を盾で殴り、そして確かなんのダメージも表示されなかったのを共有できた。

「つちよ！ 確認の為だけにとかさあー！」

「ゼロじゃないのか。いやゼロならゼロでそう出るか……てか実際ダメージ入ってんの？」

「え？ あー確かに痛かったけど……」

「茶釜さん非力だからなあ」

「試すか」

「おい死ぬわバカ」

言いながら建御雷君が半歩下がりが半身になれば、その正面にいた式式君は慌てて飛び退く。

確認の為に致命傷は誰だって嫌だろう。

「要はフレンドリーファイアが無効化されていないのか？」

「味方のデバフとかもひつかかるって事？」

「……：そーいやさつきからモモンガさんからプレッシャーすげえな」

言われてみれば、というもので。

指摘に反応しモモンガ君を見れば、確かに彼はいつからか黒いオーラのようなのを発していた様だ。

「えっ？ あつ、あーすいません何か勝手に絶望のオーラ出てました。消しますね」

これに慌てて身動きしたモモンガ君がオーラを消すと、心の内にあつた拭い難い焦燥のようなものが霧散していくのを感じる。

他の皆も同じような感じらしく、安堵の吐息が折り重なった。

「これうっかり自分達で結果的に自滅コンボ発動しちゃってたかも知れないのか」

「エフェクトが鬱陶しいから切つといて正解だったわ」

確かに。

有り得た話だし、そうなりかけたなら今頃こうも平静ではいられまいね。

「そうか……：モモンガさんのせいだったのか……。何か胃にズンとくるものがあるからストレスで早くもやられたのかと思つた……」

「へロへロさんその体で胃があるの？」

「ええ？ あるでしよ胃くらい……多分……」

「どの辺りかな……」

へ口へ口君とタブラ君が話すのを聞きながら、一つ思いつく。

「そういえばフレンドリーファイアの件を試すにも簡単な手があったか。モモンガ君、ちよつと」

手招きすれば彼は玉座からこちらへ歩いてくる。

脳や諸内臓、血管に神経や筋線維すらも無いその体がどうやって歩き、どころか喋り思考しているのか甚だ疑問だが、現実として彼は彼として存在していた。

魔力の類があるとしてもこれが許容されるのを実感させられるとどうも違和感を覚えるし、一方でそれを当たり前とも思う。

早く慣れてほしい。

どちらかと言うと後者の方へ。

まあともかくだ。

「握手をしようじゃないかね」

「え、はい……」

差し出された彼の骨の手を私の仮初の手が手袋越しに握る。

弱い静電気が走ったかのような痛みが断続的に感じられたのですぐ手を離れた。

「確定だ。フレンドリーファイアは有効状態にあるから気を付けたまえよ諸君」

「へっ、あ、負の接触ですか、うわすいません朱雀さん」

「なにこの程度、勝手に回復するとも。皆もモモンガ君に触つてみると良い、ちくちくするぞ」

「マジで？」

「どれどれー」

「失礼するよ」

「えっ、えっ？ ちょよ」

となれば我も我もと確認の為モモンガ君を揉みくちやにするのは当たり前で、悲鳴のようなものを聞きつつ40人がそれぞれギルドメンバー間であつてもダメージが発生するのも確認、共有した。

し終えてみれば四つん這いで荒い息を吐くモモンガ君がなにやら哀れ気ではあつたが。

「ダメージ表記は無く、しかしダメージは存在する。絶望のオーラの影響があつた事を鑑みればバフデバフも範囲内なら両方しつかり影響するのだろう。フレンドリーファイアの無効はユグドラシルだからであり、無いなら此処がユグドラシルではない何処かだという補完になってしまう」

「でも魔法はどうなります？ ユグドラシルでないなら魔法が我々の思う通り機能するかどうか」

「試してみればいい、こう、単純なもの」

〈五重最強化〉!!
クインティプレットマキシマイズマジック

「えっ」

オードル卿の問いに応じたらオードル卿が暴走した。

……確かに五重最強化はできている様だ。それを示す四つの光珠が彼の周囲に現れ、魔法の発動を待ち侘びているかのように揺らめいている。

成程ここまでは結構な事だ。

が、何せ事が事、どんな魔法であれ最大化された挙句五つ同時に発動するのが確定してしまっている。そして発動者が誰であろうウルベルト・アレイン・オードルとなると、一体どんな魔法であれば何事もなく済むだろうか……？

〈伝言〉
メッセージ

「ああ」

疑問に囲まれた彼が颯爽と右側頭部辺りに手をやった事で、成程それならと私を含めた幾人かが納得した——その瞬間だった。

「ぐああああああっ!?!」

「おいやめて」

「うるっせえバカ!!」

「われる、われる」

「ぐっ……がっ……!」

魔法が発動した途端に五人ばかりが突如頭か頭と思しき辺りを抱えてのたうち回り始めたのだ。

オードル卿の正面、たまたま近い所にいた不運な彼等が〈伝言〉を受け取ったメンバーなのは想像が付くが……しかしこれは……？

「げ、いやなんか……すみません。こんな事になってしまうとは。と言うか一体何が？」
慌てて手を離し〈伝言〉を停止させたオードル卿自身も何が起こったか分かっておらず、痙攣する五人をやや混乱気味に見ている。

どうしたものかと頭を抱える五人が落ち着くまで暫し待つと、やがてそれぞれがどうか口を開き始める。

「いや呼び出し音がめっちゃうるさかった」

「あれ防ぎようがないぞ多分……とんでもない音が頭ん中に直接来たから……」

「なんて嫌がらせだ……耳鳴り……脳鳴り？　がする……!」

「最大化で何故か音量が最大化されて割とダメージあつた感じだぞ今の。物理じゃな

く

「最強魔法かな？」

成程、何が起こったかは十分に察せられた。

たかが〈伝言〉がそんな事になってしまふとは。

皆が皆五重最強化の無駄撃ちと思っていた為にどよめきが起こる。

「うわ……それはまた……うん、本当申し訳ない。回復した方が？」

「それはありがたいが……治るのか？」

「外傷以外も効くのかねえ？」

「やるだけやった方がいんじゃない？」

「何か障害でも残ったら嫌過ぎるしやまいこさんいつちよ頼みます」

声を掛けられれば半魔巨人の大柄な肉体を揺らしやまいこ君が歩み出る。

「おっけーおっけー。うーん……えっと、〈大治療^{ヒール}〉？ ぐらいで良いのかな……？」

恐る恐るといった風合いだがやはり魔法は発動し、目に優しい柔らかな光が舞い散った。

「おお……すげえ、めっちゃ楽しかった」

効果有りだ。これで外傷ではないから無効とされたらそれぞれの回復力に委ねなければならぬ所だった。

そうと分かればとやまいこ君に続き〈大治療〉を使える者がそれぞれに魔法を施していく。

〈伝言〉を受けた面々が目に見えて復調していくのは小気味良くもあり、不気味でもあった。

「助かったわ……」

「これポーシヨンとかでも同じ回復効果あるのかなあ」

「もう一回〈伝言〉するか？」

「嫌だ」

確かにポーシヨンを試すのはまたの機会としよう。あの即答っぷりからしてかなりの、いや想像を絶するであろう音で脳を直接殴られる様だし。

「……とりあえず〈伝言〉の強化は禁止にするとして」

「異議なし」

「さんせー」

「概ねユグドラシルでありつつだがユグドラシルでは決していない。ほぼ、そんな知らない何処かな訳かね、ここは」

改めて現実を突き付ける。

周りにも、そして自分にも。

これが現実なのだ。

我々は迷子になった事を自認せねばならない。

いや早計か？

しかしこの身体が、実感が、起こっている状態が既にゲームの延長では有り得ないのだ。

ただ証拠を揃えてしまえばしまう程に何故こうなってしまったのかが分からない。一体何が、どこで、どのような干渉の仕方をしたらこうなるのか。

ううむむ。

「あーそうだ。〈伝言〉いけるなら端から連絡してつてみりやいいんじゃないか」

おっと良い気付きだねるし★ふぁー君。コンソールが出ない以上外部との連絡手段はほぼこれに限られてしまった様なものなのだし。

「成程、やってみる価値はありそうだ。では〈伝言〉が使える者は交信可能そうな心当たりに随時連絡してみよう」

私を含めた各々が手を側頭部にやって思い思いの対象に向けて〈伝言〉を発動、応答を待つ。

期待、或いは不安か、皆が固唾を飲むのを感じる。

出来れば良い方で応えて貰いたいものだが……。

……。

「……………駄目か」

全員が状況を認めるのに二十分程度を要した。

現実には相変わらず無情で、それは我々の希望が我々の都合を優先している以上、どうしようもなく当たり前だ。

「まあこうなる予感はあるが、実際なると中々キツイ」

「まあ仕方ないよ、俺らの知人ってそう多くねえし、ログインしてたかも定かじゃないし」

「ギルド自体にレITTER付けられてから他とあまり交流持てなかったしねえ」

「そういやGMとかどうしてんだろなあ」

「少なくとも私達と同タイミングまでゲームにインしてたのは間違いないだろうからねえ」

「GMなら返事なかったよ」

「マジかあ…………」

どうしても気落ちしてしまう。いや仮にGMに届いたとしても、届くのならそれどころではないだろうが。

空気が重くなるのは避けられず、溜息、意味のない呻き等が響いた。

「所でそろそろ言つて良い？」

そんな中で茶釜君が挙手と共に声を上げる。

「何を？」

「還りたいんだけど。私だけじゃなく皆今日も予定あるでしょ？」

余裕が無いのか、彼女にしては妙に平坦な声。

成程気持ちは良く分かる。

どちらも皆同じ気持ちだろうとも。

「まあそうだが……」

「でもなあ……これちよつとどうしようもなくないか。そもそもどうしてこうなったかも分からんのに、還ると言うか戻ると言うか、手段の講じようがなあ」

そうなのだ。

理由が分かれば還るにせよ諦めるにせよ判断材料として大いに役立つだろう。

だがそれすら分からないのだから混乱の度合いは広く深い。

「いや諦めるには早いですよ」

再び嫌な空気になりかけた所でモモンガ君が茶釜君に倣う様に挙手をした。

その語気には確信めいた力があり、誰もが彼を見、言葉を待った。

「ある程度はユグドラシルの理屈が通じるのなら、この流れ星の指輪を使えば……例えば即座のワールド移動は候補に入る筈ですから」

「その手があつたか」

「あ、それボクも持つてるから一緒に使おつか」

「うん？ 常識的に効果が倍増されるとは思わないけど……」

「一度に同じ願いを乞うなら効果が全く変わらない事もないんじゃないか。一応非ユグドラシルなんだし」

「試してみる価値はあるよ」

「あー待ちたまえ、待ちたまえよ」

皆で話が進んでいくがそこに敢えて水を差す。

何事かとこちらに視線が集中し、中には若干咎める色すら窺えた。

気持ちは分かるとも。

だがね。

「まだ一応、ここがヘルヘイムである可能性は否定できていない。それを確かめる前に指輪を無駄にする訳にもいくまいよ？」

「あー……いやでも、要ります？ 確認」

「うん、ほぼほぼ必要無いだろうがね。それでもここは慎重に動くべきだ。その指輪、確

かそう多くは使えなかつたろう？」

「それは……そうですが」

モモンガ君の言う事も分かるがここは石橋を叩き、様子を見、誰か身代わりを立てて先に行かせるくらいはしても良いだろうとも。

極端な話、玉座の間の扉を開いた途端そこから何かの侵入或いは流出により我々は塵と消え完全に存在が抹消される、なんていう与太事態を……果たして誰が否定できるだろう。

まるで夜闇に怯える子供の妄想の様だが、この状況ではむべなるかな。

当然、今私の選択が誤りである可能性とてある訳だが。ううむむ。

「じゃあちよつと外行きますか」

「グレンデラ沼地じゃないとなるとどうなつてんだらうな」

「沼地だつたら笑うがそれはそれで何事だよつて話になるし」

「どう転んでも一般的に異常事態だからねえ」

おっと、少し浸りかけていたらまたも周りで話が勝手に進んでしまっている。

「あー待ちたまえ、待ちたまえよ。すまないがね」

二度も、それも短い間隔で皆の盛り上がりには水を差すのは中々気が咎めた。

「またですか朱雀さん」

「まだ何かあると?」

周りの反応も先程より当たりが強い。

仕方ないね。

「何を隠そう、まだ話の途中だったのでね。でだ、我々自身で玉座の間から出るのは控えるべきと私は考える」

「ほう? ですがそこまで慎重になる必要が?」

「あるとも、たっち君。ここにはあれがある。なればこそこの場はこの地下墓地内で一番安全だ」

諸王の玉座を手で差し示す。ユグドラシルの法がそれなりに通るのであれば、ワールドアイテムが鎮座するこの玉座の間の安全性は他と比べるべくもない。

これは皆にも明白な事なので、納得から自分への風当たりが和らいだ。理を説けば通じるのは社会人ギルド……いや、この面々の長所だろう。ああ、組み合わせにも寄るが。

「それはそうですが……あ、じゃあ適当にモンスターを召喚して向かわせます?」

「いやいや、もっと適当な者達がいるだろう、ほらあの辺に」

言つて、玉座の間、自分達の反対側にいるNPC達を指差す。

若干のどよめきが起こった。

「私が思うに、アルベド達は我々と同様ユグドラシルでの存在そのままにこの状況に巻

き込まれているだろうから、姿と能力と……恐らく設定のままに自我も確立されている筈」

先程のアルベドとのやり取りを鑑みれば、少なくとも彼女はタブラ君の練り上げた器のままに在るだろう。であれば彼女の後ろに居並ぶセバス・チャン率いるプレアデス達にもそれ程の違いはあるまい。多分。

「どうだろうか？ 私としては一先ず彼女等に先鋒を任せてみるべきだと思うが」
皆を見回す。

誰からも戸惑いこそあれ否定的な気色は感じられない。

「ではモモンガ君、ちよつと頼んできて」

「えっ俺がですか!？」

「それはそうだろう。だって君、ギルドマスターという事は我々のリーダーでありこのナザリックの主、ならばナザリックのNPC達が君に逆らえる道理は無い。……と思うがね？」

「ええー……」

助けを求めるように周囲に顔を向けるモモンガ君だが、たっち君もオードル卿もぶに君も、他の誰も私の言葉を否定する素振りは見せない。

彼の事だ、また過剰な重荷を課せられたとでも思っているのだろう。

今回の事はともかく、それまでの件は大体正当な評価からなのだがなあ。

「うーん、じゃあどうすれば？」

「そう難しい事じゃない。彼女等の元へ行き、外の簡単な調査——ああ、ついでにナザリック全体が正常に機能しているかどうかの確認もして貰うと良い」

「……断られたら？」

「んーその時は……君自身が言ったように召喚したモンスターを外へ遣わす事になるだろうね。融通の利きにかなり違いが出るだろうけど」

まあNPC達に調査を任せた結果、彼等が死ぬか何かして二度と還らぬ可能性は否定し切れないが……今ここまで言う事もあるまい。

如何につい先日まで彼等どころかユグドラシルそのものを忘却していたとはいえ、一度は己の心血を注いで作り上げたキャラクター達だ。私だつて可能な限り洩る。

「えーと、まあ、アルベド達の所へ行つて外の調査を頼むのは了解しました。でも朱雀さんにも付いてきて貰いますよ？ 言いだしっぺの奴です」

「ああそれは構わないとも。私としても彼女等の在り様は気になる所だからね」

「じゃあ俺も同行しますよ」

モモンガ君に並ぼうとしたらオードル卿も付いて来た。

「いや、オードル卿に足労願うまでもないよ。あまり大勢で行く事でもない」

「何故です?」

「ふむ」

軽い手招きの後彼の方へ少し顔を寄せ、小声で。

「簡潔には、警戒される恐れがある」

「なん……」

咄嗟に出たであろうオードル卿の反対的意见を手を挙げて遮る。

「少なくともモモンガ君は、今日までギルドと大墳墓を存続させてきたギルドマスターであるからして、NPCの信頼もきつと篤かろう。だが我々はどうかね? 或る日を境に足跡を絶やし、或る日急に戻った我々を彼等はどう見る?」

「……………」

私の言葉にオードル卿はすぐに反論しようとし、しかし声を発さず口を閉じた。

彼とて思う所はあろうね。

そして彼に限らずこの会話が漏れ聞こえた者達は、どこかしら後ろめたさを窺わせる沈黙を醸していた。

分かるよ、分かるとも。

私とてヴィクティムにどんな顔を見せられたものやら。

先のアルベドの態度があっても、NPCが現実的な存在として在るならば、我々はお

よそ肯定的には見られていないに違いないだろう。

存在の疑問視すらされても不思議は無い。

……かも知れない。

ひよつとしたら大喜びされる可能性は……いやいくらなんでも虫が良すぎるか。

「ですがそれは」

「そうだね、杞憂であるかも知れないとも。だが、多少でも安全な方策を採るべきだろう」

「多少……安全？」

「彼女達が我々にとつて間違いなく安全だという保証は？」

私の言葉に対する当然の疑問に問い返す形で応える。

仮定ばかりで確証が無いのだ。

ならば都合の悪い方で考えた方が良い。

「……成程、ではつまり二人は囷も兼ねると？」

これにオードル卿がおよそベストな返しをしてくれた。

その通りだとも。

頷いた私に彼はその獣面に渋面を浮かばせる。

「不服かな？」

「……いえ、そういう訳では。分かりました、ですが何かあったら無傷とはいきませんよ」

「それは仕方ない、私が死ぬ前に手を打ってくれたまえよ」

流石にモモンガ君は手を出されないだろうが、私は出されて不思議は無い。

「そういう流れになりそうだったら私が教授を庇いますから。私なら大丈夫なんでしよう?」

聞こえていたのだろう、モモンガ君が話題がどんどん不穏な方へ行ってしまうのを防ぐ様に、話題そのものを遮るように私とオードル卿の間に身を割り込ませる。

うん、あまり愉快的な内緒話ではなかったね。

「ああモモンガ君、それならかなり安全そうだね——と、そうだぶに君」

「はい?」

「こちらに一応注意は向けつつだが、君等で追加の共有作業をお願いしたい」
「追加と言うと……」

植物性の手で顎の辺りを撫でる彼に、私のしようとした事の続きを依頼する。

まあ彼なら大まかで大丈夫だろう。

私が覚えている彼から大幅に劣化しているなんて事は無からう筈だし。

「少なくとも私には五感と、後リアルの肉体での支障が全く感じられないというものが

ある。その辺を含めて、ユグドラシルとの差異についてより詰めていつてもらいたい」

「あー成程。じゃこの広間から出ない形で無難にやってみますよ」

「お願いするよ——さて、モモンガ君、グレート・テレポーション位ト転レ移トとかなら一瞬だろうが、少し歩こうか？」

私が一步を歩めば彼も付いて来る。

「……はい」

とはいえ声やら所作やら明らかに硬い。

「なに、そう緊張する事もあるまいね。……そうだ、本当にもしもの時は私と私の使徒達でモモンガ君を護ろうじゃないか」

「ええ……？ それ朱雀さんがもし暴走状態になったら私達で討伐しなきゃならないじゃないですか。フレンドリーファイア有りなら滅茶苦茶大変ですよあれ」

「ううむむ……まあたつち君もオードル卿もいるし、不利は私にあるから何とかなるだろう」

「止めてくださいよ、嫌ですよ私は」

「いやはや、同感だねえ」

「もー頼みますよ本当」

大仰に肩を竦めれば、モモンガ君は呆れた様に首を振る。

話題が話題だったものの、少しは緊張が和らいだ様だった。



「じゃあ皆、モモンガさんと教授がNPCに話を付けに行く間にも幾つか詰めて行こう」
ぷにっと萌えの呼びかけに皆肯定的な反応を示し、ではどうするかという方向に舵が向く。

とはいえするべきは相も変わらず現状の確認で、ならばどうしたものかと皆思考を巡らせる。

「あ、一つ気付いたんだけど」

そんな中式式炎雷が言った。

「ん?」

「さっきからどうもパニくりそうになる度になんかスーツとするんだけど……俺だけかこれ?」

その指摘に誰しも身に覚えがあったのだろう。

彼の言葉にああそういえばと皆口を開く。

「あつそれ私も」

「そーいや何なんだこれは」

「無理やり鎮静剤打たれた感じで嫌なんだよな」

「条件は……まあパニックか」

「うーん、ひよつとしてバッドステータス扱い？ 要は混乱じゃん？」

「となるとスキルや装備の耐性か……後は種族特性で防ぐ感じか」

「まあ皆なるって事はそうなるね。混乱耐性ないとか戦犯確定だし」

ユグドラシルでの混乱とは思い通りに身体が動かなくなるだけのものだが、ゲームシステム上それが靦面に効果があり、混乱したら治るか治してもらいうまでじつとしてるが最適解であった。

結びのふにつと萌えの言葉にああ成程と納得が示され、それじゃあ、となった時。

「ていうかさ」

平坦な言葉が場を支配する。

誰もがその声を発したぶくぶく茶釜の方へ視線を向けた。

それだけ異様さが際立つ声だったのだ。

「どうしたの茶釜さん」

「ここがヘルヘイムである可能性はまだゼロじゃないでしょ？ 本当、何かの手違いがあつてとかで、運営も今必死になってるかもだし」

抑揚に欠けた台詞運びにペロロンチーノなどは小声でやべえと呟きすらし、彼のそれが無くとも彼女に余裕が無くなっているのは誰の目にも明らかだ。

「まあそうだけども……でもゲーム側のバグで個々のユーザーそれぞれに深刻な影響を及ぼすのは突飛過ぎるしさ」

「分かってるよそんな事は！」

彼女の近くに居たので宥め役を買って出たウィツシユIIIにぶくぶく茶釜は怒声で返す。

先程までと別人と言って良い程の音量と込められた感情の濃さに、直撃を受けたウィツシユIIIは数歩後ずさってしまふ。

「でもさあ！ こんな姿で、帰れもせず、どうしろつて!? —— つく、この……」

怒りのまま言葉を連ねていった所で不意に、苛立たしげに中断する。

恐らく鎮静が働いたのだろうが、混乱だけでなく感情の大幅な起伏に対してすら発動するのだろうか？ そしてあの姿でなかったら彼女は今どれ程苦々しい顔になっているだろうか。

「まあまあ姉ちゃん落ち着こうぜ？ こんな状況だし今はちゃんと集団行動しなきゃ」

「分かってるよ馬鹿」

「ええ!? ひつでえなあ!?!」

一先ず鎮静した所でウィツシユIIIに代わりペロロンチーノが姉を宥めに入った。

流石に身内からの言葉とあつて多少は効果的な様で、では取り敢えずぶくぶく茶釜は

彼に任せるとし、どうしたものかと四方山話が始まる。

「茶釜さんの言いたい事は分かるよ、ほぼ皆今日も仕事だし、このままだとクビにされそうだ」

「あーそれだ、クビだ、嫌だなあ……」

「ユグドラシルに接続していた全員がこうなったら社会問題化して見逃して貰えそうじゃね？」

「最低でも41、多くて……どれくらいだろうな」

「往時の数を考えたらぎりで万行ってるんじゃない？ 何だかんだで最後の時くらいは見に来てやろうかって奴結構いるだろうし」

「俺らみたいに誘われて思い出して来たようなものな」

「それよ」

「まあ千単位後半はいけそうな感あるか」

「うーんでも仮にそうだとすれば、かえって社会問題化は難しいと思うよ」

同時ログイン数の話からぶにつと萌えが話題の方向性を弄りにかかった。

「えーなんで？」

「だってDMMO—RPGの枠に収まらない事態になるから。脳内ナノマシンの補助を経て進化を続ける現代電脳情報社会そのものの根幹を揺るがしかねないんだ、これ。だ

から運営の上位……半端な所ではなく恐らく企業連の、それもトップ三社が乗り出して来ると見て良いんじゃないかな」

「あいつ等が？」

露骨な不快をウルベルトやベルリバー達が示す。

それはそうだ、企業連とは彼等にとつての絶対悪であり、普段声高に主張はしなかったがその思想はアインズ・ウール・ゴウンの皆の知る所だった。

「じゃあ俺達は見捨てられるつて事か？　ここにはアークロジの内側の奴だっているのに？」

「んーそれはならないと思う」

明らかな怒気を孕むウルベルトの声をぶにと萌えはやんわりといなし、死獣天朱雀の様に一度皆を見回した。

「だって幾ら何でもこの41人だけの状態ではないだろうし。だから最大限に素早く事態を収束させる為に、巻き込んだ関係者にはあらゆる手を使って口外を禁じ、世間には別の新しい情報を大量に注ぎ込んでこの事態の情報を押し流す。何なら戦争をでっち上げて良い。仮にどこかから漏れても情報統制部門を使ってデマにして……と、使い古された王道手でくる筈。……こつちからのアクションが届かない以上、事態を収束の辺りでどうにか拾い上げて欲しい所だけだね」

滔々と、それでいて淡々と。

まるで用意された原稿を読み上げるようなぶにつと萌えの言葉に幾人かは絶句した。彼の言葉が決して絵空事ではなく、知識や実感、経験からの確かな説得力があったからだ。

「それじゃあ……例えば同居人がいてもお手上げな感じか？」

「感じだね。多分何かエラー出てるから手を出せないだろうし、その状態なら然るべき所に通報もしちゃうから、あつという間に困り込まれちゃうよ」

「強制ログアウトの一瞬の狭間に全員で同じ夢を見ている、なんて事もないだろうしな。俺等がこうなっちゃってるのを巧く対処して貰うしかないのか……」

「まああくまで還れるなら、という仮定の下だけどね」

「外次第じや還りたくないまであるかも知れんぜ？」

「今はよせつて」

「つと」

ぶにつと萌えに応じて軽口を叩いたフラットフットをブルー・プラネットが小突く。

見れば先程からずっとペロロンチーノはぶくぶく茶釜を宥め続けているのだ。

「今期の仕事は当たりだったの、人気も出てたし、こんな事で躓いてる場合じゃないのに

……」

「確かに評判良いし正直言えば内心俺も鼻が高いけどさ、でも今ん所本当どうしたらいいか全然分かんないんだから」

「お前はまだ人間型してるからいいよなあ」

「えつちよ、そこで俺に矛先向くの!？」

ぶくぶく茶釜の言葉に不穏な色が混じるとペロロンチーノは敏感に反応する。

「ご立派なピンクの肉棒がぬらりと自分の方へ先端を向ければ、誰でも怖気は走るだろうが。」

「お前を始め散々卑猥だ淫猥だと言ってくれた身体にガチでなっちゃった私の気持ちをなあー!」

そして彼女の言葉に皆がどこかで納得した。

ぶくぶく茶釜はギルドの中では基本的に冷静で理性的な人物とされていたため、こういう事態に真っ先に激するには皆どこか違和感があったのだ。

だがその違和感彼女の言葉が吹き飛ばしている。

ゲームのAvatarならともかくその容姿に本当になりました、なんていう状況、女性であれば看過するには極めて難しいだろう。それに自業自得とするにも厳し過ぎる。

「いやそれはほら! 還れさえすれば……貴重な体験としてなんとか……?」

「今……今!! 今私は今この様なんだよ!!」

鎮静が入ったのだろう、ぶくぶく茶釜の声の覇氣に明らかな沈降があつたがそれを無理矢理に大声で押し通す。

同時に身体が脈動しながら膨張を始め、いきり立つその様は色々と拙かった。

「わああ止めよう姉ちゃん！ マジで！ ヤバいから!!」

ペロロンチーノも今や見上げばかりな姉の有様に半泣きである。

「百も承知だよ愚弟!!」

そして無理矢理な怒りが物理的な波濤となつて襲い掛かろうとした時、ぶくぶく茶釜とペロロンチーノの間に二人ほどが割つて入った。

「へーいかぜつち、どうぞう」

「今回ばかりは弟くんに分があるよー?」

やまいこと餡ころもつちもちだ。

「う、ぐ、む……」

仲の良い二人から待つたがかかれば、流石にぶくぶく茶釜とて無茶は通し辛い。見る見る内にその身体が萎んでいく。

「こんな状況だもの、しかもかぜつちはその体だし取り乱すのは分かるけどさ」

「そうそう。でも、だからって、当たり前散らすのはらしくないよ?」

「むむむむ……」

こう丁寧に言われてはもうこれ以上続行のしようも無い。

恐らく肩を落としているのだろうぶくぶく茶釜は、やまいこと館ころもつちもちを交互に見た後、ちよいちよいと小さく弟へ手招き。

えー？ というジェスチャーを返すも改めて強めの手招きを受け、ペロロンチーノはゆつくり姉へと歩む。

彼が姉の傍らに立つた時、裾を軽く引かれて屈んだ所で何か耳打ちをされた。

何とも言えない風に嘴を打ち鳴らした後、彼も姉に耳打ちを返す。

それで終わった。

ぶくぶく茶釜はペロロンチーノから離れ、親友二人の傍へ。

ペロロンチーノはその場で背伸びをし、やれやれと体を弛緩させる。

「なんだあれ」

「仲直りしたんじゃないの」

「ああ……成程ね……？」

まあそういう事なのだろうと他人達は判断するしかなく、取り敢えずは落ち着いたんだなど安堵が広がった。

「そっういえばさっきの指輪だけど。モモンガさんが言ってた奴」

タブラ・スマラグディナがふと思い出す。

「もしあれを使う事になったとして、サーバーの電源落ちてるまでありそうだけど……その場合どうなるんだっけ」

「理屈で言えばサーバーエラーからの強制ログアウトとそう変わりはない筈。つまり強めの乗り物酔い程度じゃないか？」

「ナノマシーン不足で強制切断された時よりはマシな程度だね」

何気ないウィツシュIIIの言葉。

その瞬間、多数が気付きの声を上げた。

「そうだナノマシーンがあつたな。あれが規定値以下になれば直ちに追い出される訳だから……」

「最短で誰からだ？ 俺はまだ結構残ってる」

「俺後40時間くらい」

「他には？」

皆思いつくそうと指折り数えたり首を傾げたりしているが、結局スーラータンの40時間間が最短ではないかという事となった。

「なつが。それならこつちからも手を尽くした方が良いな」

「やるだけやつといた方がヘルメットのログ的にも後で有利になるだろうし」

「あるといーなー、その後つてのさ」

「ふむ……では使うとして、やはり流れ星の指輪になるか？」

「星に願いをで良いんじゃないか」

「併用？」

「うーんでもあれレベル使うからなあ。万一を考えると躊躇うものがあるよ」

「あー……まあ確かに」

「じゃその時が来たら指輪でいきますか。どっちも未使用ですよね？」

「私はそう。多分モモンガさんも使っていないんじゃないかな？」

どっちもエリクサー余らせるタイプだし、やまいこは小さく笑った。

「後は〈^{ゲート}転移門〉……いや〈^{ブレインズ・ウオーク}次元渡り〉や〈^{ワールド・ゲート}異世界門〉は？ 玉座の間から出るのはちよつ

と怖いけど、還れそうな感じなら使える奴等だけでも還った方が」

「……んん、ダメだな。行き先の指定が出来そうもねえや、なーんか靄がかつてて行ける

気が全然しない」

通常の最上位転移魔法より更に上、種族やクラス特性の組み合わせで習得出来る転移

魔法の名を挙げたものの、返事は芳しいものではなかった。

既知の場所だけではなく未知の場所への転移すら可能な筈なのだが、使用者が無理と

直感したのなら強行するにはリスクが大きい。実際〈^{異世界門}〉であつても様々な要因

から転移出来ない場所というのは存在するのだ。

「マジか……」

「となると指輪に託すしかないかあ……?」

しんみりした空気になるも、そこでぷにっとなつと萌えが柏手を二度、三度。

外見からすれば意外と固い感じの音がし、皆の注目を集めてこう言った。

「さ、それじゃあ実証の続きと行きましよう」

話題の出し方が強引なのだが、あのままの空気よりは無理にでも明るくいった方がましだろう。

「取り敢えず炎完全耐性持ちに火球当ててみるって事で」

「つしゃ来いやあー!」

それを察したアルペロ・トウルーリがわざわざセルフバーニングへ「自己燃焼」で自らに燃え盛る青い炎のエフェクトを纏わせる。

元々完全な炎耐性があるのに自身に炎耐性を付与する魔法を使った所で明らかに無駄なのだが、気分の問題だろう。現役時代からそうだった。

「よし分かった、良いんだな?」

これにウルベルトが口端を吊り上げ笑ったものだから、アルペロ・トウルーリからすると若干引き攣った笑みを返さざるを得ず。

「ええと……優しくして?」

「魔法で加減をする方法は寡聞にして知らないからな……
クインティフレットマキシマイズマジック
〈五 重 最 強 化〉！」

「お前え！ 耐性あつてもまだ確実じゃないんだからそういうの止めろよ！」
そして、火球のそれとは思えないような爆発音が響いた。

茶釜君が声を荒げたと思えば何か爆発音のようなものまで聞こえ。

「うゝむ何やら騒がしい。まあ仕方ないが」

背後の様に振り返りこそしないが苦笑が混じる。

言葉通り本当に仕方なくあるのだろうか。

とはいえしきりに後ろを振り返るモモンガ君の気持ちも大いに分かる。

「……あ、そうだ」

「ん？」

「教授は本当にアルベド達が私達に危害を加えると思っっているんですか？」

こちらに少し身を寄せ、潜めた声で。

尤もな問いだった。

それでいて少し遅い問いでもあるが。

「ゼロではない」

彼と同じように声を潜める。

「もつとも、さっきの軽いやり取りを鑑みれば殆どゼロだろうが……」

「100%以外は信じるな、ですか？」

「そうだとも。それに迂遠であろうと確認はしていくものだよ、手遅れにならない程度にね」

「手遅れですか……朱雀さんは実際どの辺りまで考えているんです？」

「と言うと？」

意外な問いに思わず足が止まってしまふ。

一歩先んじた形になったモモンガ君も立ち止まり、こちらを振り返る。

「だってさっきからずっと主導的な位置でギルドの皆を引っ張ってくれているじゃないですか。おかげで助かってますし……」

「ああ、別に私に特別な何かがある訳ではないよ。現状に対する知識は皆と変わらないし……まあ偶然と、人生経験の差かね」

「そうなんですか？」

歩き出し、今度は少し先んじる形になった自分にモモンガ君が慌てて並ぶ。

「そんなものだよ。それにほら、以前良く言ったろう、私は君等が生まれるよりも前から趣味人をやっているのだよ？」とね。要は蓄積した妄想の差だとも」

「ははは、久々に聞きましたそれ」

「そうだろうねえ」

互いに小さく笑い合い、気付けば随分とアルベド達の姿が大きくなっている。

こちらの会話や後ろの騒ぎが気にならない訳ではないだろうが、整然と跪いたまま微動だにしないのは異様であり、一方でこちらの命令を愚直に守っている様にも思えた。

「さて、そろそろだ。大筋はモモンガ君に任せるからね」

「ええーやつぱりですか……」

「理由はもう並べてあるじゃないかね。なに大丈夫大丈夫、君の手には黄金の杖があるし、後ろにはたっち君達がいるんだ、何かあってもHPの半分も削られまいよ」

露骨な難色を示すモモンガ君の肩……肩の辺りを軽く叩きつつ。

「それはそうですが、うーん」

「さ、腹を括りたまえよ。過去台本無しにタブラ君でも舌を巻いた宣戦布告の長口上をやつてのけた君なら大概大丈夫だとも」

「そんな大仰な話じゃないですよねえ？」

「はっはっは、であるならやりたまえよ」

「……ずるいなあ」

そうこうする内にアルベド達の元まで辿り着く。

あちらからこちらまでずっと彼女達から目を離さなかつたのだが、今に至るまで動き

は無い。

ちらとこちらを窺うモモンガ君に頷き、早くしたまえよと急かす。

「……………あ……………。……………アルベド」

「は」

悩んだ後にRP用の声を選択したモモンガ君に対する短くもはっきりとした返事は、成程、それだけで忠誠の高さというものが窺えた。

私自身人を使う側でもあるので返事からその者の心情を推し量ったりもするが、アルベドからは少なくとも害意は感じられない。

そして返事をしたまま動かない彼女に、モモンガ君はどうしたものかと言った風に改めてこちらに顔を向けてくる。

この様子では確かに私が付いて来て正解だったか？

或いは私が居るせいなのかもしれないが。

ともかく手招きに近いジェスチャーで、一先ずは頭を上げさせる様ヒントを出す。頷いた彼は直ちに実行した。

「面を上げよ」

「はい、モモンガ様」

実に滑らかに彼女は顔を上げた。

プログラムされた動きにしては違和感が全く無く、通常ならヘロヘロ君等の仕事を称賛したい所だが、敬意を湛えた微笑を浮かべられてはやはりユグドラシルでは無い。

モモンガ君も思う所があったのだろう、アルベドの挙動に若干圧倒された風だった。

「あ……いや、現在先程朱雀さんが言った様に、驚くべき事態……いや、もう未曾有の事態かな。とにかくこのナザリックは異常事態に見舞われていると思われる」

早くもぐだぐだになってきたモモンガ君の台詞回しだが、それでもその内容によりアルベドの美しい顔に緊張がはしる。

「そこでだ、お前達にナザリックの外へ出て調査をしてもらいたい」

が、モモンガ君のこの言葉に一気に柔らかな表情を浮かべ、

「貰いたいなどと仰らずとも、モモンガ様はただ御命令下されば良いのです」

一度首を左右に振りつつ、言葉には敬意の他に少々の媚びがあり。

「え、そうなの？」

「まあ……彼女が言うならそうだろう」

思わず素で返したモモンガ君に私も付け足す。

「えーと、ではナザリックの外がどうなっているか調査せよ」

「は」

命令されればすぐに表情は研ぎ澄まされ、安心と信頼を託すに足るプロフェッショナル

ルの面立ちになる。

成程この見事なオンオフの切り替えよ。

それでいて自分の望む言葉を引き出す強かさよ。

彼女、タブラ君のなっぴい設定に基づいているのだろうなあ。

「では人選はいかが致しましょう。情報の拡散を防ぐのであれば、セバス達に一任するのが適当かと存じますが」

そして用意していたかの様にすらすらと言葉を紡ぎ出す。

或いは私の発言が聞かれていたか……？

いや、根拠が異なる。

それも彼女のアレンジかも知れないが……ううむむ。

「じゃあそれで。皆で行動すれば突発的な状況にも対処しやすいだろう」

悩んでいたらモモンガ君が早々とGOサインを出してしまっていた。

「ああ私からも注文をいいかね？」

慌てて自分の意を差し込む。

NPC達が行動にかかるのは早い方が良いだろうが、その前に幾つか付け加えたり、聞いておきたいところがある。

「はい、死獣天朱雀様、なんなりと」

アルベドがモモンガ君からこちらへと顔を向けた。

当たり前の様に思考し、判断し、会話してのける彼女はもう一個の生命体と見て良いのだろう。

「外へ出るまでにナザリック内部がしつかり機能しているかも確認してくれたまえ。各守護者の面々にそれぞれ調査させれば事も早かろう」

「了解致しました」

二つ返事かね。

第十階層より上の層の存在を確信しているのだろうか。

プレイヤーからは分からないNPCの繋がりのようなものがあるのかも知れない。

「それと、外がグレンデラ沼地と確認できるならそれでよし、そうでないなら一度……アルベドに誰かしら〈伝言〉の類で連絡を入れたまえ。こちらで協議して追加の命令を下す」

「その様に致します」

一瞬、自分が〈伝言〉を受け取るべきか迷ったが、最上位NPCの頭越しに他NPCとやり取りをするのは避けた方が良さそう。

情報の取り扱いの点でここはNPCに信用を置いておくのも手だ。

「ではここからは質問だが」

ともかく対話を続けて曖昧模倣な彼女達の定義を確立せねば。さりとて余り長々と時間を割く訳にもいくまいし。

仕方ない。

「は、」

「率直な話、アルベド……君は何者かね？」

直球且つ哲学的な問いかけになったが、これにどう答えるか見ものだろう。

ただアルベドはこれにきよんとする事すらなく口を開いた。

「私はナザリツク地下大墳墓の守護者統括として、至高の御方々の一人タブラ・スマラグティナ様に創造された者であり、至高の御方々に絶対の忠誠を誓う者」

成程そう来るか……。

疑い無く受け取るならそれが彼女のアイデンティティであり、守護者統括としての自分にプライドを持って——

「そして、恐れ多くもモモンガ様の……妻です」

「……っ」

「……………二人して照れるのは止めたまえよ」

何なのか。

いや分からなくもないがね、アルベドの様な創り込まれた精緻の極みな美女にああい

う言われ方をされるのはね。

大体モモンガ君はだね、表情など全く無い筈の骸骨顔で良くも見事に照れを窺わせてくれるものだよ。

……ああ、ええとどこまで考えたのだったか。

いかなな、ううむむ。

「モモンガ君、君、タブラ君に唆された点もあるが決断したのは君だろう」

「いやそれは……そうですがね？」

「せめて妻を見習って落ち着きたまえよ」

「あっはい。………」

まあ挙動が不審になるのも分かるがね。

溜息を挟み、新婚組から視線を動かす。

「……ではセバス、君は？ 君はどうだね」

「は。私は至高の御方々の一人たっち・みー様に創造され、ナザリツク地下大墳墓の家令として至高の御方々をお支えし、有事の際には最後の盾としてこの身を散らす覚悟を持つ者です」

言い様はアルベドと大差無い。

ならばNPCとは基本的にそういうものなのだろうか。

或いはアルベドに倣っただけだろうか。

ただそれにしても……。

「……先程から君等の言う至高の御方々とはつまり、我々の事であるね？」

「勿論で御座います、死獣天朱雀様。このナザリック地下大墳墓において至高の御方と言えばアインズ・ウール・ゴウンに属す御方で、至高の御方々とは即ちアインズ・ウール・ゴウンの皆様方の事。……もしお気に召さないのであれば別の尊称を考えますが……」

「ああ、いや、それには及ばないとも」

そんな申し訳無さそうな顔をされる事では無いのだし。

しかしどうもこう……思っていたものと勝手が違う。

敵愾心を剥き出しにせよとは言わないが、こう忠誠心を露にされてはどうも居心地が悪い。

「ではプレアデスの面々についても先の問いの答えは概ね同様のもの？」

「はい、我等プレアデス、至高の御方々に創造され、至高の御方々の為に存在する者。捧げる忠誠の程はアルベド様やセバス様にも引けを取らぬと自負しております」

代表したユリ・アルファが朗々と応えれば、彼女の妹達は一斉に頭をより深く下げる。

腰とか大丈夫かね君等。

若そうだから平気か。

ただプレアデスもアルベドやセバスと同様なのもう当たり前の領域と言えようか。それにしても、知的階級が希少となった向こうにおいて自分は一定以上の敬意を向けられる存在ではあったが、NPC達からのそれは比にならない。

だが考えてみれば納得もいこうかね。

彼女らを創ったのは？

ナザリツク地下大墳墓が現在の形になったのは？

そう、全てアインズ・ウール・ゴウンの仕業だ。

NPC達にとってアインズ・ウール・ゴウンとは即ち神にも等しい、いやそれに勝りかねない絶対者としての価値を持つだろう。

造物主などと言う妄想の産物を信じた事は無いが、例えばこうも分かりやすくその存在を感じる事ができたなら、私とて少なくとも服従はするに違い無い。

であればもうNPC達を警戒する必要は無いだろうか……？

「ふむ……ふむ？」

玉座方面から一際大きな騒ぎ、それも宴会の様な笑いが起こる。

これには流石にモモンガ君共々振り返ってみれば、たっち君が正義降臨を背負ってポーズを決めており、残りの面々が「本当に出たよ」だの「クツソウケる」だのと爆笑

中だった。

あのね。

少しはこちらの空気を読んでくれまいか。

無理かね。

まあ無理だろうね、仕方ない。

だがどうしてくれるのだこの空気。

「うむ……ああ、先程から玉座の方で色々やっているのは、あれは今の我々が何をできるかを確かめていてね」

どうにか取り繕おうと言葉を並べながらアルベド達の方へ向き直ると、皆何やら嬉しそうと言うか、感動と言うか——特にセバスが顕著だったが、とにかく私が思っていたのとは違い否定的な意思は全く見受けられなかった。

至高の御方々だからなのか？

訳が分からない。

新人研修生が無理矢理作ったお世辞笑いの様な顔が一つも無いのはどういう事だ……。

「……よろしいでしょうか？」

困惑が鎮静を呼ぶ前にアルベドの声が私を冷静にさせる。

「構わないとも」

「何故、その様な事を？ 至高の御方々であれば数多の魔法、スキルを使いこなし幾多の冒険を成し遂げて来た筈……」

「まあ、尤もな疑問だね。そして何故に答えると、現状、我々にとつても何一つ分からない手探りの状態なのだ。自分の身体の動かし方や、魔法の効果やらからね」

嘘を言つても始まるまい。

私の包み隠さない言葉にアルベド達は驚きや疑問を窺わせ、モモンガ君の方へ視線を向ければ彼も頷いたので改めて驚いている。

「それ程の……」

「そうだと。でなければ、我等のモモンガ君に対する儀式が途中で止まる筈も無い」
「成程……」

実にすんなりと納得した様だった。

先程の確認の仕草もだが、やはりNPCにとつてモモンガ君はアインズ・ウール・ゴウンの中でも一段上の様だ。

当然と言えば当然だがね。

「さて、では私からの水差しは以上だ」

差し当たり聞きたい事は聞いた様に思うので、主導をモモンガ君に返す。

「あ、はい。えー、ではセバスとプレアデスはまずナザリツク全体が正常に機能しているか確認するよう各守護者に伝達しつつ、外の様子を……調査する前に一度こちらに連絡をする様に」

「はっ」

モモンガ君の命令にセバスが重みのある頼もしい返事をし、プレアデス共々揃って立ち上がる。

この辺りの集団行動の見事さはゲームを思い起こさせるが……。

「おーい」

「ん？」

後方、玉座方面からの呼び声。

振り返って見れば、ああ、なんとも子煩悩な事だね。

「見たまえよ、君等の……創造主達も手を振って見送らんとしているよ」

「おお……」

「何と勿体ない……」

「やるつすよー!」

「静かにしなさい」

感動し涙ぐむ者まで居る中、元氣よく万歳しながらびよんびよん跳ねまでして怒られ

たルプスレギナ・ベータについては——ああ、成程成程？ 創った側に多少似てしま
うものかね。

「では行つて参ります」

「約一名の行動を完全に無かつた事にするかのような堂々たる風情でセバスが慇懃に
お辞儀をすれば、プレアデス達も一斉に倣う。

「うむ」

「そうしてモモンガ君の返事を受け、彼等は玉座の間より辞さんと扉に手をかけ、開き、
開いて、ソロモンの小さな鍵が見え、彼等が外へ出、閉じ、閉じ切つた。

「重い音は失せ、しかしこれと言つた変調は感じられず、アルベドも平然としたものだ。
「どうやら扉の外は存在し、そこへ出ても何事も無いようだった。

「……まあ当たり前か。

「だがその当たり前すらつい先程まで曖昧だったのだし、もつと疑うならばNPCとい
うこのナザリツクに根差した存在であるからとも考えられる……流石にこれは考え過
ぎの類ではあろうが。

「……あの、モモンガ様、死獣天朱雀様」

「ん？」

「どうしたね」

門扉をいつまでも眺めているとアルベドから声をかけられる。

「ナザリック内部の確認に各守護者達を動員するのはより確実ですが、こちらから確認は容易に出来るのでは？」

不安げな声音に一瞬間な予感がしたが、彼女の言葉はこちらの予想を大幅に上回るものだった。

「出来るのかね？」

私の問い返しに彼女は不思議そうな顔すら見せる。

まるでこちらの疑問がおかしな事であるかのような。

「では……マスターソース・オープン」

彼女が耳慣れない単語を発したかと思えば、彼女の正面に半透明で光る板が発生する。

「……………」

「……………」

思わずモモンガ君と顔を見合わせた。

そうだ。

あれは、あの妙に見慣れたウィンドウは、我々が開くに開けなかったコンソールのそれではないだろうか？

「……あの?」

そしてアルベドの声音はどうとう不安さすら感じさせるものだった。
うんうん。

済まないがこちらとしても余裕が無くてね。

「……アルベド」

「はい」

「……なんだね、それは」

「ナザリック地下大墳墓の管理システムです。この玉座の間でのみ、私と至高の御方々がアクセス可能なのですが……ひうつ!?!」

「コンソールとちよつと仕様が違いますねこれ」

私の問いに答えていたアルベドの横から覗き込みながらモモンガ君が言う。

それどころでは無い為当人は何も気にしていない様だが、アルベドがもう沸騰せんばかりの有様になっているのは率直に表現すれば滑稽で滑稽で。

いやー良かったとも、ペストマスクを被っていて。

「……だが……中身に大した差はなさそうだ」

取り澄ましてモモンガ君の反対側に立ち、アルベドが出したマスターソースとやらを覗き込む。

並んでいる文字列、恐らくそれぞれに触れれば該当画面に遷移する作りなのだろう。ただやはり試すのであれば個々に出した方が不自由は無いか。

「アルベド」

「はい」

「聞いた感じでは我々にもアクセス権限があるようだが、その手段は？」

「マスターソース・オープンと言って頂ければ」

「成程、成程」

モモンガ君と頷き合う。

早速実行してみた所、アルベドの言う通り我々の目前に管理システムのウインドウが現れた。

「おお……」

「うむ……」

感心の声を小さく上げつつ、表示内容にあれこれ触れてみれば、多少の仕様の違いこそあったがユグドラシルのコンソールのそれと見て問題は無さそうだ。

となればこれを向こうの連中にも教えてやらねばなるまい。

セバス達を送り出したので改めて別の作業に入っている面々を見、〈伝言〉を発動させる。

「……ふに君？」

『はい、どうしました教授』

「うんうん、忙しい所すまないね。一つ重大な事が分かったよ、マスターソース・オープンだ。いいかね、マスターソース・オープンだよ。この〈伝言〉が切れた後復唱してみたまえ、ではね」

『分かりました、では』

さてどうなるか……。

あつと言う間に向こうは大騒ぎとなった。

「……はっはっは、まああなるかね」

「そりやなるでしょうね」

こちらも細やかに笑い合う。

一人、何処か腑に落ちないと言うか、どうにも不可思議な顔で我々を見ているアルベドが少々気の毒ではあったが。



——我々は何故こうなったかも分からず、自力で還る標も無し、と。

今にして思えば、概ね恙無くセバス達を送り出す所まで漕ぎ着けたのは僥倖と言えたりうね。

ある意味茶釜君が真っ先に激発したのも幸いだったかも知れないよ。
まあ尤も、それから一難去ってまた一難、と言った所ではあるか……。